

宮崎滔天のア・ジア主義

— 大陸浪人の一類型 —

山口 光 朔

- I 序 論
- II 孫文の革命運動と日本人
- III 大陸雄飛の思想的背景
- IV 初期の海外活動とその挫折
- V 革命か改革か——孫文と康有為
- VI 惠州事件前後の諸活動
- VII 革命団体の統一と内部分裂
- VIII 辛亥革命以後の協力関係
- IX 結 論

I 序 論

アジア主義とは、いったいどういうものか。このことばの概念はひじょうにあいまいである。それは、反動思想としては膨張主義ないし侵略主義と同義語であり、進歩思想としてはアジア連帯論とのからみあいから民族主義ないし民族独立運動と同義語だというふうに理解される。前者の方向は、玄洋社や黒竜会に代表される「大アジア主義」を生みだし、日本の帝国主義的侵略を促進した。後者の方向は、社会主義とむすびついて、プロレタリア・インターナショナルリズムの立場から、前者の軍事的侵略に対抗して非戦論ないし反軍国主義にもとづく権力への抵抗のたねをまいた。その間にあつて、北一輝は社会主義と民族主義とを結合しようと苦闘してついに超国家主義にはしり、日本のファッショ化を助長した。それと反対の例は、プロレタリア・インターナショナルリズムに立脚したアジア主義の確立につとめた尾崎秀実であろう。このようにみると、歴史的には、アジア主義なるものは、膨張主義ないし侵略主義とかさならないし、ナショナルリズム（民族主義、国家主義、国粋主義）や左翼インターナショナルリズムともかさない。しかも、右翼と左翼のいずれの側にも、アジア主義的傾向と非アジア主義的傾向がある。そういう意味では、アジア主義とは「ある実質内容をそなえた、客観的に限定できる思想ではなくて、一つの傾向性ともいべきもの」^①にはかならないといえる。これが、日本の「アジア主義」である。

このように、アジア主義の問題はきわめて複雑である。なぜなら、この問題は、わが国における近代国家の形成と密接不可分な関係にあるからだ。すなわち、わが国におけるアジア主義は、幕末期における欧米列強のアジア進出に対応して、日本の国家的独立という問題と関連しつつ、欧米列強のアジア政策に抵抗するというかたちで発展して、日本を盟主にアジア諸民族が団結して欧米列強をアジアから駆逐することを理想とするにいたった。そのかぎりにおいて、その起源は、とおくは幕末期の尊王攘夷論にまでさかのぼることができるであろう。のちに、康有為とも

に変法自強運動をとなえて戊戌の新政に活躍した中国の改革者、梁啓超が戊戌の政変で一八九八年（明治三一）に日本へ亡命したさいに吉田松陰の話を聞いて吉田という変名を用いたり、はじめ中山周と称していた亡命中の孫文が、その名前が有名になると高野長英の名を借りて変名につかったなどというエピソード^②は、このことをほのめかしているといえそうだ。そのことはさておくとしても、アジア主義が政策のかたちではじめて具体的に日本近代史の上にある思考方法のはじまりであって、のちの大井憲太郎の大阪事件もその典型で、昭和期のファシストたちの思考方法につながっており、わが国のアジア主義の主流とでもいふべきものの源流をなした^③。その間にあって、もっぱら裏面工作の面で活躍して日本の軍事的膨張政策の推進に貢献した玄洋社と黒竜会は、日本のアジア主義の主流を代表する団体として、まるで膨張主義ないし侵略主義の代名詞であるかのような存在とされている^④。事実、かれらの行動は、歴史的にはわが国の大陸侵略政策の進展と期せずして表裏一体化していた。このことは、否定しがたい。

しかし、この現象が表面化するのには、日本の帝国主義コースが確立されて以後のことであって、すくなくともそれ以前のアジア主義は、海外雄飛という単純な動機を軸として、アジア各地の政情の不安定やわが国における産業革命の進展や欧米列強のアジア政策などの諸条件から自己流の政治的信念をつちかい、それによって行動するというかたちでそだてられたといえるのではなからうか。そのかぎりでは、初期のアジア主義はきわめて複雑であった。とはいえ、一般的には、自由民権期にその運動の挫折を契機として露呈してくる「民権」と「国権」との乖離は当然ながらアジア主義の育成をうながして、究極的には明治末期に確立される玄洋社・黒竜会の侵略的・膨張主義的ないわゆる「大アジア主義」へと一本化される経過をたどる。これは、イデオロギー的には、アジア主義の超国家主義的傾斜をものがたっている。その過程において、「民権」と「国権」との結合の進歩的な意義は消滅して、「国権」が「民権

「にすりかえられてしまい、国内的には明治日本にそだちつつあった自由主義がしだいに見うしなわれていく。」^⑤

だがそうなるまでには、「民権」と「国権」は、内外の情勢との関連において微妙な分離と結合の状態をしめしていた。そのかぎりにおいては、膨張主義とアジア連帯意識とも未分化で、微妙な分離と結合の状態をくりかえしていた。のちに侵略主義的集団と目される玄洋社にしても、「民権論」的立場から「国権論」的立場へ転回するのは一八八五年（明治18）ころからだとはいえ、^⑥ 実質的に侵略主義的色彩が濃厚になるのは、一九〇〇年（明治33）に同社から分岐して黒竜会ができて以後、すなわちわが国の国策が帝国主義の方向に確定されて以後、だといえるのではなからうか。

わが国におけるアジア主義は、以上のような問題点をふくみつつ成長し、発展した。もちろん、アジア主義なるものは複雑であって、けっして単純に系譜づけることはできない。たとえば、岡倉天心は、侵略的ないわゆる「大アジア主義」とはおよそ無縁なアジア主義者で、アジアとヨーロッパの文明の異質性に着目して、真にアジアの文明的な特質をとりもどすことにおいてアジアを生かすことを説いたユニークな存在であった。このことは、竹内好氏が指摘するとおりである。^⑦ とにかく日本のアジア主義は、けっして一つではなかった。このことは、アジア主義が社会主義とむすびについても、民族問題がつまずきの石となって多くの転向者を生みだし、「大東亜共栄圏」という虚構におどらされて侵略的な「大アジア主義」のお先棒をかつぐ者たらしめたことにもあらわれている。さらにはまた、戦後、日本共産党の五一年テーゼから八回大会綱領にめめされているように、左翼に民族主義的偏向が顕著にあらわれているのも、ある意味ではアジア主義の現代左翼版と評することができる。

以上からわかるように、日本のアジア主義は、ただたんに戦前の日本のみならず、現代日本の諸問題とも関連のあるきわめて重要な問題といえる。もちろん、ここでそのすべてについて論じつくすということは不可能である。そこ

で本論においては、日本のアジア主義の生成期にあってもっとも重大な一九〇〇年前後（すなわち、国策としての帝國主義コースのはじまる時期）を重視して、そのころに活躍した一アジア主義者たる宮崎滔天（寅蔵）の思想と行動を概観し、それをつうじて日本のアジア主義の再検討をこころみてみたいと思う。

- ① 竹内好「アジア主義の展望」竹内好編『アジア主義』（『現代日本思想大系』第九巻）（一九六三年）七—四一ページ参照。
- ② M.B.Jansen, *The Japanese and Sun Yat-sen*, Cambridge, 1954, P.19.
- ③ 拙稿「大井憲太郎の國權主義」京大読史会編『国史論集』（一九五九年）一七三—一七五四ページ。
- ④ E・H・ノーマン『日本における兵士と農民』（陸井三郎訳）（一九四七年）一五九—一九八ページ。
- ⑤ 拙著『異端の源流—中江兆民の思想と行動』（一九六一年）一五一—一五四ページ。
- ⑥ 同上、一五六ページ。
- ⑦ 竹内好、前掲論文、四二—四四ページ。

Ⅱ 孫文の革命運動と日本人

宮崎滔天（一八七一—一九二二）は孫文の中國革命を積極的に援助した志士で、いわゆる大陸浪人の代表的な人物のひとりと目されている。そのかれの名を有名ならしめたのは、自己の情熱をひたむきに中國革命によせてそれにもやしつくすことのできないでいる失意をあからさまに披歴しつつも、なお革命成就への確固たる信念をいだいて革命運動への復歸を夢みるといったかれじしんの波乱にとむ三十有余年の前半生を卒直にえがきだした自伝『三十三年之夢』の出版に負うところが大である。この本は、一九〇二年（明治35）に出版されて、十数版も版をかきねたとのことである。しかも中國語訳もでて、中國人にもひろく読まれた。金一訳『三十三年落花夢』（一九〇三年）がそれである。その後、一九二六年（大正15）には明治文化研究会によって、吉野作造校訂の複刻本がだされ、一九四三年（昭和18）にも文芸春秋社から複刻本がでてゐる。さらにさいきんには、筑摩書房の『世界ノンフィクション全集』第三

三卷（一九六二年）に一部分を省略した現代語訳（三田正道訳）が収められ、また同じく筑摩書房の『現代日本思想大系』第九卷『アジア主義』（一九六三年）に一部分が収録されている。このことそれ自体が、わが国におけるアジア主義の変遷をしめす縮図の感があつて、興味ぶかい。そのことはさておくとしても、この作品は、いわゆる「志士」氣質のみちあふれた人物で、「大陸浪人」として革命運動に挺身した熱血漢たるかれじしんを、酒と女を背景としつついかにも「明治的」なタッチで、いきいきとえがきだしている。登場人物に孫文をはじめ、犬養毅や頭山満などの大物がそろっていることも、興味を倍加させている。それゆえにこの作品は、いくたびか小説や戯曲の材料にされた。戦後には一九五三年に、東京の芸術座において、菊田一夫脚色、森繁久弥主演の「風雪三十三年の夢」が上演されている。かれの生涯はそれほどに劇的であつた。

だが、日本のアジア主義という観点から宮崎を主役としたドラマを書くとするれば、そのエピローグは、革命いまだならざることをうれいつつ一九二五年（大正14）に北京で客死した孫文の遺体が、その後国民政府軍の北伐が成功して、一九二九年（昭和6）六月一日に、あらたにたてられた南京郊外の紫金山上にある中山陵に安置される移柩式の場面とすべきであろう。その当日には、いまはなき革命の父、孫文に敬意を表すべく、早朝より無数の群衆が中山路に押しかけた。儀仗兵を先導とした葬礼車がしずしずと、二マイルの行程を四時間かかりで紫金山に到達した。時間は午前一〇時半ごろである。中山陵の前での最後の式典に参列した一群の日本人のなかには、この日を待たずして死んだ宮崎の未亡人槌子と二人の息子、竜介と震作、がいた。そのほかに、ひとときわ風ぼうのめだつ、二人のひげをはやした老人がいた。蒋介石のとなりにならんでいるのが犬養毅で、もうひとり頭山満であつた。いうまでもなく宮崎夫人は、いまはなきもうひとりのひげ男、宮崎滔天の代理である。^①

この三人のひげ男は、いずれも互いに協力しあつて孫文の革命運動を支援した点で一致している。しかしながら、

各人はたがいにいささかニュアンスのちがうグループの代表的存在である点で異なっている。犬養は、立憲改進黨の流れをくむ政党政治家で、議會主義者として知られている。頭山は、いうまでもなく國家主義的膨張論者で、その派の大御所的存在である。これにくらべて、宮崎は、自由民権論を背景にして中國の革命運動の援助に異常な情熱をもやしつづけた特異な存在である。この三つの相異なるグループが互いに協力しあつて、孫文の革命運動を助けたということは、まことに奇妙なことである。だがそれは、かれらが内政にたいする不満と歐米列強のアジア侵略にたいする反対という点で意見が一致したからである。敵があまりにも強大だということが、各グループの協力關係を成立させた唯一の理由であつた。^② もちろん、頭山と宮崎の両グループは、動機と行動の複雑な組みあわせの点からすれば、いささか似かよつてゐる。そしてその点は、當時としてはひじょうに微妙で、はつきりと識別することは不可能である。とはいえ、宮崎が海外雄飛の夢をえがいてはじめて上海にわたつたさいに、當時同地で日清貿易研究所（東亞同文書院の前身）を經營していた軍出身の荒尾精らを、「支那占領主義者」と批評し、「異主義者の集團」ときめつけてゐる。^③ したがつて、宮崎のがわからずれば、自分らと玄洋社Ⅱ黒竜會とのあいだにはつきりと一線を画してゐるわけだ。また一方、黒竜會がわも、荒尾精らは高く評価してゐるが、宮崎をあまり評価してゐない。^④ それなのに、これら三つのグループの協力關係は成立してゐたのである。ここに、當時のアジア主義なるものの特性が如実にしめさるゝといえよう。

では三つのグループの協力關係は長つづきしたかというところ、そうではない。ここにもまた、當時のアジア主義の複雑さがあらわれてゐる。宮崎の一派は、初期の計画の挫折と資金難のために宮崎がいったん引退したりして勢力がおりえ、一九二二年（大正11）のかれの死とともに消滅してしまつた。同志の多くも、引退してしまつた。もちろんその引退をよぎなくさせたのは、侵略主義と連帶意識という互いに相反するものの微妙な対立にプラスして、當時の

中国の複雑な政局に対応したわが国政府の具体的な政策とかれらの活動とのずれからきたるジレンマである。それは心情と論理のずれからくるジレンマでもあった。日清戦争以後の帝国主義コースの確立は、心情のいかんにかかわらず、論理を一方的に侵略の論理に片寄せた。頭山を中心とする玄洋社・黒竜会は、しだいに侵略の論理の急先峰としての色彩を明確ならしめる。それに反して、かつては国家的独立という課題と国内的な運動のゆきづまりから対外強硬論に走った自由主義者と頭山らの膨張論者たちとの協力関係も、その後の国力の充実・伸長によって対外問題の重要性が減少するにつれて、しだいに疎縁になり、こんどは内政の面で議会主義と国家主義との対立というかたちで互いに反目しあうことになる。とくに一九二五年（大正15）の護憲三派内閣による選挙権における財産・居住制限の撤廃を規定したいわゆる普通選挙法の施行をめぐって、両者の関係は急激に悪化した。そしてついに犬養は、一九三二年（昭和7）に、議会政治を否定する国家主義的過激派の海軍青年将校の一派によって暗殺されてしまう。いわゆる五・一五事件がこれである。皮肉なことに、これは、張作霖爆死事件を契機として総辞職をよぎなくされた田中義一内閣のあとをうけて、中国通としての犬養があらたに对中国積極策をひっさげて内閣を組織してまもなくのことであつた。そして犬養の暗殺を契機として、しだいに軍部が政治に進出し、やがてファシズム体制が確立されるにいたる。ここにもアジア主義の複雑さが如実にしめされているわけだ。

これが、犬養・頭山・宮崎らの協力関係のおおまかな推移である。とすれば、さきにあげた日本のアジア主義をテーマとする宮崎中心のドラマそれ自体は、じつはそれよりもはるかに規模が大で劇的な破局を予定されている大ドラマのプロローグにすぎなかったことになる。

① 宮崎竜介「父滔天のことども」宮崎滔天『三十三年の夢』（一九四三年）二九五ページおよび Jansen, op. cit., PP. 1-2.

- ② Ibid. P. 4. 同書は、この三つのグループを中心に、孫文の革命運動と日本人の協力関係を分析している。
- ③ とくに竹内編『アジア主義』所収の『三十三年の夢』一五四ページによった。文芸春秋社版（一九四三年刊）では荒尾の名を「某君」とし、「支那占領主義者の一団なりとなし」という字句がぬけている（六五ページ）。これは、宮崎竜介氏のあとがきからもわかるごとく（三四一ページ）、戦時中の検閲で削除されたものと思われる。ただし、本論においては、特記しないかぎり文芸春秋社版を用いている。
- ④ 竹内、前掲論文、二三ページ。

Ⅲ 大陸雄飛の思想的背景

宮崎滔天の思想的背景はどのようなものであったのだろうか。このことをあきらかにすることは、かれの諸活動を理解するうえで、きわめて重要である。そこでかれがはじめて大陸に進出するまでの半生を概観して、思想の形成をあとづけてみよう。

白浪庵滔天こと宮崎寅藏^①（戸籍上は虎藏）は、明治三年二月六日（西暦では一八七一年一月二三日）、熊本県玉名郡荒尾村（現荒尾市）に生まれた。かれの家は郷士で、父は長藏（別名、長兵衛ないし真雄）、母は佐喜といい、かれじしんは一人目の末っ子であった。だが、多かった兄弟のうちで成人したのは男三名、女二名にすぎず、しかも長男の八郎（別名真郷）は西南戦争にさいして西郷軍に参加して戦死した。このことは、父が剣道の達人で、維新後に各地に武者修業にでかけたということとともに、少年のかれに大いに冒険心をうえつけたようだ。それと相まって長兄の八郎がはやくから自由民権論の提唱者であったことは、かれに反骨と在野精神を身につけさせたといえよう。かれは少年時代に親類や村の老人たちから長兄の話を聞いたことを回顧して、「されば余は、大将豪傑の何者なるやを知らずして、大将豪傑たらんことを望み、自由民権の何物なるやを知らずして、自由民権を善き事と思い、また官軍や官員や、総て官のつく人間は悪人の類と心得居たり。嗚呼家庭余に善からざりし歟、余家庭に善からざりし歟。

余や今実に斯の如し」といっている。^②

長兄について、一〇歳のころに父をうしなった宮崎は、のこる二人の兄、民蔵と弥蔵とともに（姉二人はすでに嫁いでいた）母の手ひとつでそだてられた。この二人の兄もまた、かれに多大の思想的影響をあたえた点で注目にあたいする。民蔵は、宮崎家の生活をおして地租改正以後の明治の農民の窮状に関心をいだき、上京して自由民権運動の感化をうけて土地改革問題ととりくむにいたり、土地復権会の中心メンバーとして活躍する。そして、のちにはヘンリー・ジョージの単一税制策に共鳴する。このことは、弟の宮崎をおして孫文にも影響をおよぼしたと考えられる。また弥蔵は、大阪に遊学して、自由民権論を媒介としてアジア連帯意識にめざめ、はやくから中国の革命運動にふかい関心をいだいて、直接に宮崎を行動にかりたてた兄で、孫文とともに援助する。そういう意味では、宮崎にたいする感化力がいちばん大で、宮崎とともに中国に雄飛せんところざしたが、病身のために若くして死んだ。いいかえれば、宮崎はかれの遺志をついで活躍したともいえる。

少年宮崎は、小学校をおえると官立の中学に入れられたが、そのころのかれは、自由民権運動のたかまりと農村の不穏な空気から自由民権思想にかぶれ、立身出世的な学風をきらって壮士をきどり、西洋的自由主義の紹介に活躍している徳富猪一郎の経営する大江義塾に転校した。この塾は、一八八〇年代の民権運動の高揚によって輩出した私塾のなかでもひととき目だった存在で、自治的な学風のゆえに有名であった。当時のかれにとっては、同塾は「理想郷」であり、「余が理想よりも遙かに進歩せる天国」であった。^③講義のなかでとくに感銘のふかかったのは、徳富のフランス革命史であったようだ。そういう意味では、同塾は、感受性のつよい少年宮崎に西洋的自由主義の概念をうえつけるとともに、英雄主義と革命精神をつちかわせる役割を演じたといえよう。だが感受性がつよければつよいほど懐疑心がもたげてきた。疑問が、愛国心をめぐって山積し、やがてその解決をえぬままに自暴自棄になり、塾則に反

して酒にうさをはらすようになった。そして同塾にいたまらなくなったかれは、旧友をたよって上京する。おもうに、これは血の気の多い少年宮崎の、当時のわが国のおかれている状況のもとで主義・理想と現実とのずれに誘発された欲求不満と、大江義塾のキリスト教主義的禁欲主義にたいする反発からきた反抗的行動であろう。

だが、東京へでた宮崎を待ちうけていたのは、いわゆる文明開化の風潮におぼれた友人たちの享楽主義の生活であった。いなかから急に都会へでた宮崎が、それをおもしろくおもわなかったのは当然で、ますます虚無的となった。バプテスト派の教会に出入りしてキリスト教に接し、聖書にふかい感銘をおぼえるのはそのころのことである。そして、外人宣教師から信仰と英語の手ほどきをうける。さらにたまたま上京中の旧師徳富猪一郎によって組合派の小崎弘道牧師に紹介され、同師の番町教会にかよって、信仰をふかめた。その間にかれは、私塾を去って東京専門学校（早稲田大学の前身）に入学している。このことは、同校が改進黨的色彩がつよい点で、かれじしんは「自由」という字に心酔し、「先天的」「遺伝的」に改進黨がきらいであったが、のちにかれが犬養に接近することと、なんらかの関係がありそうだ。そのことはさておくとしても、同校で政治・法律にかんする専門的知識を学んだことは、かれの思想形成に大いに役だっていると考えられる。それに、組合教会に出入りしたことは、かれが同派の共和的な教会政治と信条の自由に好感をいだいたことから考えて、その信仰とともにかれの将来にすくなからざる影響をあたえたようである。また、小崎牧師は、その著『政教新論』（一八八六年刊）からもわかるごとく、封建制度と結びついた儒教を批判するなどの批判精神のもち主であったから、多少とも同師から近代主義の手ほどきをうけたと考えられる。かれはその小崎牧師より洗礼をうけている。これは、一八八八年（明治21）春ごろのことである。かれがいかに熱心なクリスチャンであったかは、母親や二人の兄を説得してついにクリスチャンたらしめていることからわかる。

宮崎がアジア問題に関心をいだくようになったのは、かれが洗礼をうけてまもなくのことである。かれは、洗礼を

うけた年の夏に、休暇を利用して上京した兄弥蔵から中国問題の重要性を教えられた。これは、のちに二人が協力して中国革命に挺身せんとするにいたるとぐちとなるわけである。ちょうどそのころ、病氣のために帰郷している兄の民蔵から、凶作のために家運が傾いたとの知らせをうけて、宮崎は弥蔵と前後して帰郷し、東京遊学を断念して、半年あまり二人の兄とともに家にいた。この間に小作人が過重な負担に苦しんでいる実情に接した宮崎は、民蔵の感化をうけて、農村問題に関心をもちはじめた。とともに、社会主義にかんする手ほどきをうけた。

ついで熊本にでて、徳富と同じく熊本バンドの出身で、当時熊本において伝道に従事していた組合派の牧師、海老名弾正に師事して、西洋思想一般についての知識をふかめた。この海老名牧師は時代思潮にたいするすごい洞察力のもち主であり、その信仰は進歩的・自由主義的で、その門下から吉野作造・小山東助・鈴木文治・内ヶ崎作三郎らの政治・文化・労働運動の指導者がでたことから考えると、さきの小崎牧師以上の感化を宮崎にあたえたようだ。その後にかれが長崎のメソジスト派のミッション・スクールに入学したさいに、課外に民蔵の感化で社会学を学んだばかりに神学と哲学を選択したのも、海老名師の感化によるものといえよう。また、同校においてしきりに転会を勧誘されたが、あくまでこれを拒否している。宮崎はその理由を、「組合派の教会政治を離るるは、自由民権を棄つる所以なりと思惟せるが故なり^⑤」といっている。だが、皮肉にも同校で課外の科目を学ぶことをおして、三位一体論に疑問をいだき、ついには三兄弟そろってそれを全面的に否認して、キリスト教から離れるにいたる。ここで惜しまれるのは、宮崎が海老名師との接触をたもてなかったことである。というのは、海老名師は、そのころ一八九〇年代にさかんになるいわゆる「新神学」の影響をうけて、いちだんと自由主義的神学の普及につとめつつあったからである。その海老名師は、熊本に英学校と女学校を創設したのち、一八九〇年（明治23）に、日本伝道会社（組合教会の伝道機関）の社長になって京都へ去ってしまった。とはいえ、宮崎が一時的にもせよキリスト教的教養を身につけた

ことは、のちに孫文と接するさいに、孫文が熱心な聖公会の信者であったことを考えると、この二人が急速に親密になる一つの要素になったといえよう。

キリスト教と縁をきった宮崎は、ふたたび人生の目的を失ったが、そのときにかれの心をとらえたのは、ひとつは社会救済の夢であり、もうひとつは恋愛であった。かれは、長崎でスエーデン生まれの老人の通訳をしているときに前田槌子と知りあつて恋のとりことなり、いちはやく夫婦約束をした。だが、社会救済の夢を忘れられずに煩悶した宮崎は、兄の弥蔵に早婚を反対されるがままに、海外に逃げて恋のきずなからのがれることをくわだてた。そして、まずハワイに渡り、金をつくつてのちにアメリカへ留学することを考えて、その渡航費を工面して長崎にゆき、同地で船を待った。ところが、弥蔵が東京からとんできて、大陸へ雄飛することの必要性を説いて、かれのハワイゆきを思いとどまらせた。これが、宮崎にとつての運命の転換期となる。弥蔵がかれに中国の実情をことまかに説明し、ともに手をたずさえてアジアの再興につくすことを決意させるのである。長崎で弥蔵と語りあかした夜こそは、宮崎にとつて、「実に余が半生の方針を確立せる記念の一夜」となった。とともに、兄の弥蔵は「余がために闇中の灯明」であり、「我が一生の進路を指示する羅針盤」であつた。かれら二人は、「パンを与ふる」ことこそ肝要であるが、そのためには「社会改造の論（や土地処分法案や、）皆議論に於て既に陳腐」であるから、「（要はこれを実行するにあり）」とし、「（これを決行するの道、ただ腕力の権に頼るの一法あるのみ）」と断じる。そして、「世界の現状に鑑みて、露国が野蛮的暴力を振って人道を蹂躪し、民権を掠奪し去るの日あらんことを憂へ」て、「之を掩衛擁護する上にも亦腕力の権に頼らざる可らざるを思念」し、「進んで人道を宇内に敷くに於ても、或は退いて人権を擁護するに就て、その執れよりするも腕力の基礎の切要にして且急務なるを認め」て、中国の革命を推進するために大陸に雄飛すべきだと結論するのである。^⑥

こうして、中国革命に挺身する志士、宮崎滔天が生まれた。宮崎と兄弥蔵の二人は、大陸における活動計画をねって、その断行に着手した。まずその手はじめは、大陸に渡って中国の言語・慣習・政情の研究に従事することであった。そこで宮崎は、二人の兄の民蔵の反対を押しきって、ひとまず上海へおもむくことになった。おもいたったらあとにひけない性質のかれは、友人の裏ぎりによってほとんど無一文のまま、単身上海へのりこんだ。一八九一年（明治24）五月、すなわちかれが満二〇歳のときのことである。青年宮崎は、このときにはじめて大陸に足をふみいれてこれを「第二の故郷」たらしめんと決意したのであった。

① 宮崎の生涯については、かれの自伝、および同書の文芸春秋社版二九二―三四二ページ所収の宮崎竜介「父滔天のことども」を参照。

② 『三十三年の夢』二五―二六ページ。

③ 同上、二九ページ。

④ 同上、一二七ページ。

⑤ 同上、四九ページ。

⑥ 同上、五八―六〇ページ。ただし、（ ）内の引用文は、竹内編『アジア主義』所収の『三十三年の夢』一五〇―一五一ページよりの引用。

Ⅳ 初期の海外活動とその挫折

一八九一年（明治24）に上海へ渡った宮崎は、資金難のため、わずか一カ月半ばかり同地にいただけで、日本へひきかえした。もつとも、友人、宗方小太郎の教鞭をとっている荒尾精とその一派の経営する日清貿易研究所に寄食して計画を実行する方便はあった。しかし、若い理想家のかれは、「支那占領主義者」とは主義・主張を異にするとの理由で、同所に寄食することをいさぎよしとしなかった。では、かれの大陸活動の真意は、いったいどこにあったの

か。はたしてかれは、いわゆる「支那占領主義者」とどのようにちがっていたか。このことを、じつさいに大陸で活躍するまでの諸活動をおして考えてみよう。

不幸にも出発点で挫折した宮崎は、帰国して四年間というものを無為にすごした。その間にかれは、許婚者の槌子と結婚して、一子、竜介、をもうけた。だがかれが、平穩な家庭生活に満足しなかったことはいうまでもない。そこで、弥蔵と協議のうえ、当時日本に亡命していた朝鮮の改革者、金玉均と協力して計画を実行に移すことをくわだてて、一八九四年（明治27）春に上京して東京で金と会見した宮崎は、金と意気投合し、ともに中国で活躍することを期して、まず金が中国におもむき、帰ってきてから諸活動にかんするくわしい計画をたてることを約した。ときまさに日清戦争ばつ発直前で、朝鮮をめぐる日清両国の対立は日ましに激化の一途をたどりつつあった。この機をとらえてことをなさんとしたことは、そのねらいがどこにあったかはつまびらかでないまでも、宮崎の時勢を見る目がするどかったことをものがたっている。ところがまもなくして金は上海で暗殺され、宮崎兄弟は計画を根本的に立てなおすことをよぎなくされる。これが第二の挫折である。

おりから日清戦争がおこったが、宮崎兄弟は自分たちの理想に固執して、母親が通訳官ないし軍人として従軍することをよく主張したにもかかわらず、あくまでも従軍志願をこわった。そして、アメリカへゆくという名目で旅費をつくって、ひそかに中国へ潜行することをくわだてて、まず弥蔵が上京し、ついで宮崎も東京にでて、資金の調達につとめながら計画をねった。その結果、ひとまず宮崎は華僑の多いシャムに渡って準備をととのえ、しかるのちに中国へのりこむことになった。また兄の弥蔵は、頭を弁髪にして中国人になりすまし、横浜の中国商館にボーイとして住みこんで、機会の到来を待つことになった。

ところで、宮崎が兄とともに日清戦争への従軍をがえんじなかったということは、さきの荒尾一派にたいする批判

とともに、注目にあたいたい。このことは、かれら兄弟の在野精神のあらわれであるとともに、当時の国策にたいする批判でもあり、さらにはかれらが、国家権力とむすんだ上からの改革方式を否定して、あくまでも民衆とむすびつき、そのことをおして内治の刷新をはからんとする下からの革命方式を理想としていたことをしめしているのではあるまいか。そのかぎりにおいては、かれらのアジア連帯感、あくまでも被抑圧民族同士のものであつて、被抑圧民族にたいする抑圧民族としてのそれではなかつたことがいえる。しかし、このことを確認するには、まだその後の諸活動を見てみる必要がある。

宮崎がシヤムへの渡航をくだした目的は、(一)、同地の華僑のあいだで生活して中国の言語・風俗に慣れるとともに華僑に働きかけること、(二)、シヤム政府の改革を援助して帝國主義勢力の進出をふせぐこと、(三)、日本農民の移民を促進すること、の三つであつた。かれは、一八九四年(明治29)一〇月に、移民会社の代理人として、二〇名余りの移民をひきつれてシヤムに渡つた。だが、植民会社の事業は失敗に歸してすでに解散しており、かれの壮大な夢も色あせてしまった。しかもかれは、香港からバンコックへゆく途中で同船した中国人労働者が動物同然のきかないありさであるのにショックをうけた。さらに悪いことには、かれらは日本人を恐れているようであつた。だがかれはいつている。「然れども余は実に彼等を熱愛するを禁じ得ざりき。余が一生を托すべき支那国民なりと思へばなり。余が大に用いて以て人道恢復の用をなさしむべき民と思へばなり。然り、我に敵意なければ人皆我の味方ならずや」^①と。この感想は、惠州事件が失敗したのちの、一九〇二年(明治35)『三十三年の夢』出版の年)ころに書かれたものであるだけに、注目にあたいたい。当時のわが国の一般的な風潮は、日清戦争の勝利に酔いしれて、いわゆる「チャンコロ」意識がひろまっていたことをしるべきである。もうひとつのショックは、シヤム国政府当局が日本人の入植の動機に疑問をいだいてあまり積極的な関心をしめさなかつたことだ。しかし、農商務大臣のスリサック侯に会見

した宮崎は、入植が将来有望であるとの確信をえて植民会社を再建することに意を決し、いささか良心の痛みを感じつつもマラリヤに悩まされつつ鉄道工事に従事する移民をあとに残して、一八九五年(明治28)の末に日本へ帰った。

帰国した宮崎は、さっそく広島におもむいて、広島移民会社にシヤム植民会社再建の話を持ちこんだが、会社側はのりきでなくて、その話は不首尾におわった。だが、義理がたい宮崎は、シヤムにのこしてきた移民たちのことを思い、事業の継続を期してふたたびシヤムに向かう。その間にかれは、横浜で病床にある兄弥蔵をたずねている。弥蔵はそれからほどなくして死んでいるから、これが最後の会見である。また郷里の熊本に母親や兄の民蔵、自分の妻子をたずねたりしている。こうして三カ月あまり帰国した宮崎は、翌春に、こんどはのちに中国でも働く同志となる平山周と末永節、妻の弟の前田九二四郎などをつれて出発した。かれらは、シヤムでの事業の成功を信じ、しかるのちに中国への進出を期待して、宮崎に同行したのである。だがその航海は、香港ではペスト流行のために出航停止をくらい、汕頭・シンガポール経由の船にのりかえるとしげに悩まされ、しかもせまい船室に千余人の中国人労働者とともに押しこまれて赤道直下の熱気と汚物の臭気に蒸されるといった悲惨なものであった。シンガポールでようやくその苦勞から解放された宮崎一行は、上陸して、その当時スマトラ開拓を計画して同地にきていた大井憲太郎をたずねている。宮崎はそのことを回想して、「君乃ち余等を伴ふて旅宿扶桑館に至り、酒肴を供して歓待を極む。彼其美人?を抱いて疏髻を撫し、ビールを傾け生卵子を噉り、意氣傲然として東方経綸を説き、スマタラ〔スマトラ〕開拓を談ずる処、血氣の壯夫をして顔色なからしむ。亦旅中の一快事なりき。未だ知らず君猶当年の意氣ありや」といっている。このことは、いろいろな意味で興味ぶかい。第一は、かの大阪事件で有名な自由民権運動の指導者としての大井の面目がいきいきとしめされていることだ。第二は、かれの「東方経綸」の論には、さすがの宮崎も「顔色なからしめ」られたということである。第三は、「未だ知らず君猶当年の意氣ありや」といっていることである。この

ことは『三十三年之夢』が出版された一九〇二年（明治35）という時点において、宮崎じしんが失意のどん底にあるということとを考慮にいれると、いったいどういう意味なのであろうか。かつて海外進出をくわだてながら、いまは労働者や小作人の組織などという国内問題に専念してむくわれずにいる大井にたいする同情のことばであらうか。それとも当時の大井の努力を幸徳秋水流に資本家のための下働きと見なしての批判、ないしは「意気傲然と……」という形容のなかに多分に膨張論者の要素をみとめての批判のことばであらうか。ここでは資料が不足なために断定したいが、いずれにしても大井の思想と行動には疑問が多いだけに、きわめて意味深長だといふべきであらう。

シンガポールからバンコックまでの船旅は、天候にめぐまれて快適だった。だが、同地でかれらを待ちうけていたものは、コレラと孤独と失望であった。事業は資金難のためにはかどらず、成功の見こみはうすれる一方である。そこへ兄の弥蔵が手紙で、広州で第一回蜂起に失敗した孫文が日本に亡命してくるから、シャムの事業を適当にきりあげて帰国するようにとすすめてきた^③。とはいっても、移民を見殺しにするわけにはゆかぬ。このジレンマに見まわれた宮崎は、いちおう事業が小康状態をたもっているのを見とどけたのちに、生活資金をえる目的で帰国した。しかしかれは、もうシャムにはもどらなかつた。かれの帰国後に農園経営が失敗し、かれの同志もかれのあとを追って帰国したからである。

宮崎が帰国したころ、兄の弥蔵は横浜の病院で病床にあり、母親もまた熊本の病院に入院していた。ひとまず郷里へ落ちついたかれが、母親の退院を見とどけたのちに、弥蔵が危篤との電報に接して兄の民蔵とともに上京してみると、弥蔵はすでに帰らぬ人となっていた。かれをたえずはげまし、ともに中国へ雄飛することを約していたこの兄の死は、かれにとっては大きな打撃であった。とはいえ、やがて元氣をとりもどした宮崎は、シャムにおける植民事業の再建をくわだてて、友人にすすめられるがままに、平山周といっしょに、一八九六年（明治29）一〇月中ごろ、当^④

時進歩党の代議士である犬養毅を訪問する。宮崎は、幼少のころより大隈重信を収賄者と信じこみ、かれの党（改進黨＝進歩党）がきらいであったので、この会見にはあまりのりきでなかったとのことだ（それにしては、一時早稲田専門学校に学んだことは不可解だが）。だがかれは、会ったとたんに犬養に魅了されてしまった。もちろん、それには、犬養が中国通だとうわさがプラスしているのであろう。このことは、その当時に母親へ書いた手紙のなかで、犬養のことを「進歩党代議士にて中国西郷など云はるる人」と書いていることでもわかる。そしてその会見で犬養に過去における政府の北海道移民策の失敗を論じ、シャムへの移民がいかに有望であるかを説明した。そして犬養の尽力で、一〇月一九日に第二次松方内閣の外務次官、小村寿太郎と面会して、シャムの植民事業のことを話しあっている。思うに、これは、政府官僚と接触した最初ではあるまいか。ただし、このことは、当時の外相が大隈重信であったことから考えるべきであろう。かれは、そのときの様子を同日付けの妻への手紙に「小村次官も大に同感を表せられ賛成の事を明言せり彼等も暹羅（シャム）の東方政策上重要な争点なることは知り居るものの如し」と書いている。また、進歩党の政治家では、犬養のほか楠本正隆、尾崎行雄などもシャムのことについて話しあっている。^⑤

しかし、当の宮崎じしんの心は、すでにシャムよりも中国にとんでいたようだ。じつは、犬養に会った真意は、かれをよくしつたのちに中国ゆきの援助をたのむことにあったのであろう。そこへもってきて、幸か不幸かシャムの事業のことはなかなかほかどらない。そのころの宮崎は、犬養に会うごとに、「寧ろぶち明けて其目的を語らんか、イヤ待て、今までの辛抱をと孤疑沈吟」する。また犬養は犬養で、宮崎の本心を見ぬいて、かれがそれをあかすのを待ちかまえていたふしがある。犬養は、宮崎が中国ゆきにそなえて、弁髪用に頭髮をのばしているのをからかったりしている。それなればこそ、とうとうしびれをきらした宮崎が本心を打ちあげたときに、ただちに中国ゆきの援助を約してくれるのである。宮崎は、その当時のことを回顧して、「一語泰山よりも重し。……余は失望の谷を出でて再び

希望の天地に入ることを得たり。木翁〔犬養〕は余が心的再生の母なる哉」といっている。^⑥ その間の事情は、十一月九日付けの妻あてのつぎのような手紙によくしめされている。

「（前略）暹羅（シヤム）事業も大に宣布進行致申候唯此際犬養と支那の事に付て少數話し申候処同人は大に支那行を勤め費用は自分引受ると申候茲大機会と存候間従来支那国に付ては多少考へ居りたることを陳述仕候処同人も大に賛成を表し申候行掛上直に暹羅を取止めて支那に行くとも曰はれず唯望文けを持たせ他人の来るを幸に話を他に転じて其儘に致居候其後略内輪の考案も定まり申候間此度紅葉館に犬養と会合して諸事を議する積りに相成居候……今度の会合にて平生の大志願を達するの端緒愈々相開け候事と自信仕候犬養と曰ふ男は当世の政治家では第一流にて他の俗流とは少しく趣を異にし余程卓出し居る処有之候一諾を重んずる義士に候得者先方より云い出したることを取消す様な事は決して有之間敷と存候然れば今度こそは大願成就の時と存じ候何卒御喜び被下度候（下略）」^⑦

こうして犬養と宮崎の協力関係ははじまった。犬養はいろいろと宮崎の世話をみて、一八九七年（明治30）二月には、宮崎をときの外相、大隈重信に会わしている。この大隈も中国問題に関心をもっていて、のちに犬養とともに孫文を援助したりする点で興味ぶかい存在である。そしてついに宮崎は、平山周や可児長鉄とともに、外務省の秘密命令と資金をあたえられて、中国におもむき、革命運動の実情を調査するとともに諸団体と連絡をとることとなった。

宮崎の長年の宿願がいよいよかなえられるときがきたのである。もちろん、このことは、これまでではうけることをいさぎよしとしなかった政府の援助によって実現する点で、宮崎のアジア主義にたいする疑問を生ずるおそれなしとしない。だがこれは、あくまでも犬養と大隈の中国への関心と宮崎の理想とのかみあわせで理解すべき問題だ。それを解くカギは、じつさいの革命援助のための諸活動のなかにあるといえるであろう。

- ① 『三十三年の夢』八四ページ。
- ② 同上、一一〇ページ（傍点筆者）。
- ③ 同上、三〇〇ページ。
- ④ 同上、三三五―三三六ページ所収の宮崎の妻あての手紙（一〇月一九日付け）による。なお、Jansen, op. cit., P. 58. は、「当時犬養は、一八九六年（明治29）の大隈・松方短命内閣の閣僚」としているが、これは事実と反する。犬養が入閣するのは、一八九八年（明治31）の第一次大隈内閣（いわゆる隈板内閣）である。
- ⑤ 『三十三年の夢』三三五―三三六ページ。
- ⑥ 同上、一二九―一三〇ページ。
- ⑦ 同上、三三六ページ。

V 革命か改革か―孫文と康有為

外務省より秘密命令をうけた宮崎は、おり悪しく病氣のために平山と可児を中国に先発させ、みずからは数カ月おくれで、一八九七年（明治30）七月に香港へおもむいた。おくれた間の収穫は、横浜で亡兄弥蔵の知り合いの興中会の一員で一八九五年（明治29）の広州における蜂起に失敗して以来日本に滞在している陳少白に会い、革命の闘士孫文の人となりをつまびらかに聞くとともに中国における革命運動の実情を知らされ、さらに中国にいる同志に紹介されたことだ。そして香港で、元興中会の会計であった区鳳墀から、日本へ亡命せんとしている孫文の保護を依頼され、すでに六月に孫文がロンドンをたつて、アメリカ経由で日本に向かいつつあることを知らされる。これを聞いた宮崎は、急拠日本へひきかえすことに意を決する。孫文は、一八九四年（明治27）にハワイと香港を足場に興中会をつくり、翌年一〇月に広州で第一回蜂起に失敗して、いったん日本へ亡命したのちアメリカをへてロンドンにわたり、ふたたびアメリカ経由で日本にきて、再起をはかろうとしていた。

香港で宮崎が関心をいだいた指導的人物としては、孫文のほか、康有為がいる。かれは康の名声を聞いて康に会

おうとしたが、たまたま北上していてためであつた。孫と康、この二人のいずれと提携すべきか。このことは、まだ二人に会っていない宮崎にとっては、興味ぶかい問題であつた。

「彼等其思想主張に於て同一なりき。即ち共に民権共和の説を把持したりき。但孫は素を泰西の学に取り、康は困を漢土の学に発す。彼は耶蘇教に養はれ、此は儒教に育つ。前者は質なり、後者は華なり。質なるものは実行を尊び、華なるものは談論を喜ぶ。二者其見地を同うすると雖も、素養性格同じからざる此の如し。則ち孫は革命の急先鋒となり、康は教育家を以て居る所以なり。革命の急先鋒は既に立つて跌けり。故に逃れて外洋に在り。人をしゝて再挙の難を思はしむ。教育家の康は依然として其私塾に在り。猶ほ諤々の弁を振つて自由共和の義を説き、椽大の筆を揮つて時弊を痛論す。前途実測る可からざるものあるに似たり。人心の漸く彼に帰向せんとしたる亦宜なる哉」^①

正直なところ、当時の宮崎には、康のちに思想的に後退することは知るよしもなく、孫と康のいずれにも優劣をつけがたかつた。しかし、運命は、宮崎をして康よりもさきに孫に会わせ、両者のあいだに強固な友情をめばえしめる。孫文は、九月に來日した^②。かれを追つてその直後に帰国した宮崎は、横浜についてすぐに、同地の陳少白の家でかれと会見している。もっとも、宮崎には、初対面の孫文の外見は、なんとなくもの足りなかつた。このことはむりもない。孫文といへば、いまでこそ中国革命の父として世界的な偉人のひとりにまつりあげられているが、その当時はまだ三〇歳あまりの貧しい一亡命者にすぎなかつた。だが、ひとたび口を開いた孫文は、雄弁に中国革命の理想を論じたてた。

「余は人民自ら己れを治むるを以て政治の極則なるを信ず。故に政治の精神に於ては共和主義を執る。然り、余や此一事を以てして直に革命の責任を有するものなり。況んや清虜政柄を執る茲に三百年。人民を愚にするを以て治

世の第一義となし、その膏血を絞るを以て官人の能事となす。即ち積弊推委して今日の衰弱を致し、沃野好山、坐して人の取るに任するの悲境に陥る所以なり。心あるもの誰か袖手して傍觀するに忍びんや。是吾徒自ら力を揃らず変乱に乗じて立たんと欲して空しく蹉跌せし所以なり」

「今若し豪傑の士の起りて、清虜を倒して代つて善政を敷かんか、法を三章に約するも随喜渴仰して謳歌すべし。乃ち愛国心以て奮興すべく、進取の氣以て振起すべきなり」

「嗚呼今や我邦土の大と、民衆の多とを挙げて俎上の肉となす。餓虎取つて之を食へば、以て其蛮力を振つて世界に雄視するに至らん。道心あるもの之を用るば、以て人道を提げて宇内に号令するに足らん。余は世界の一平民にして、人道の擁護者として猶ほ且之を傍觀すべからず。況んや身其邦土の中に生れて、直に其痛痒を受くるに於てをや。余や短才浅智、素より大事を担ふに足らざるべしと雖も、今は重任を人に求めて袖手すべきの秋にあらず。故に自ら進んで革命の先驅となり、以て時勢の要求に応ぜんと欲す。天若し吾党に幸して、豪傑の士の来り援くるあらんか、余は正に現時の地位を譲つて、犬馬の勞に服せん。無ければ即ち自ら奮て大事に任ぜんのみ。余は正に現時の地位を譲つて犬馬の勞に服せん。無ければ即ち自ら奮て大事に任ぜんのみ。余は堅く信ず、支那蒼生の為め亜洲黄種の為め、又世界人道の為に、必ず天の吾党を祐助するあらんことを。君等の来りて吾党に交を締せんとするは、則是なり。兆朕己に発す、吾党発奮して諸君の好望に負かざるを努むべし。諸君もまた力を出して吾党の志望を援けよ。支那四億萬の蒼生を救ひ、亜東黄種の屈辱を雪ぎ、宇内の人道を恢復し擁護するの道、唯我國の革命を成就するにあり。此一事にして成就せんか、爾余の問題は刃を迎へて解けんのみ」^③

とうとうたるこの海外亡命者の革命論を聞いた宮崎は、ひじょうに感動した。そして外見からのみ人物を判断しようとしていた自分の非を恥じて、孫文のために一肌ぬぐうと決意する。「孫逸仙の如きは実に己に天真の境に近きも

のなり。彼何ぞ其思想の高尚なる。彼何ぞ其識見の卓抜なる。彼何ぞ其抱負の遠大なる。而して彼何ぞ其情念の切実なる。我国人士中、彼の如きの果して幾人かある。誠に是東亜の珍宝なり」とは、そのときの会見にかんして自伝で述べているかれの孫文への賛辞である。^④ 宮崎は、心情においても論理においても当時の孫文にまったくほれこんだ。そこでさつき同志、平山周と相談して、孫文を犬養に紹介し、外務省の小村次官にも報告して、結局は犬養の世話で東京で一軒の家を借りて、宮崎は平山とともに孫、陳の二人と同居する。さらに犬養は孫を外相の大隈重信や玄洋社の平岡浩太郎・頭山滿らに紹介する。こうして、孫にたいする日本人の協力関係が生まれ、東京が中国革命のための一大策源地となるにいたった。ただし、この協力関係はまことに奇妙なものであった。というのは、頭山に代表される玄洋社は、かの条約改正問題のときの大隈重信襲撃事件に関連のある不気味な存在であったからだ。その点で注目すべきは、犬養の役割であろう。じつは、この犬養は、のちに平岡浩太郎との合作によって、一八九八年(明治31)六月にわが国憲政史上はじめての政党内閣(第一次大隈内閣—いわゆる隈板内閣)を成立せしめている。このことが犬養・頭山の両派の提携を可能ならしめたことは、孫文援助の協力関係の形成を考えるうえで無視できない。

ところで、ちょうどそのころの中国では、列強の進出による分割の危機が切迫するにおよんで、これをう렉えた康有為・梁啓超らのいわゆる変法自強派が廷臣とむすんで、光緒帝を擁して改革運動をおこしたが、それにたいして西太后らの保守派が反対するといったふうに、政局はきわめて不安定な状態にあった。当時宮崎は、的野半介にたのまれて、古島一雄の主宰する『九州日報』の番外記者として福岡にいた。このことは、同紙が玄洋社系の機関紙的存在であったことから考えると、かれの玄洋社への接近をしめしているといえよう。犬養はその宮崎に電報をよこして、いそいで中国にいつて同地の情勢をさぐるように命じた。

こんどは犬養の私費で中国へゆくことになった宮崎は、孫、陳の二人を転居させて、平山とともに上海へ向かつ

た。上海で北方に向かう平山とわかれた宮崎は、単身香港にゆき、広東とのあいだを往復して興中会、三合会、哥老会などの秘密結社員と連絡をとりつつ、中国の形勢をうかがった。フィリピンの志士と知りあって、同国の独立運動に関心をもつようになったのもそのころである。そうこうするうちに戊戌の政変がおきて、康有為が逃亡中であることを知った宮崎は、康と香港で会い、日本の援助をうけて再起をはかろうとするかれの意志をたしかめたのち、犬養に連絡をとって康の日本亡命の手はずをととのえた。その当時の宮崎は、孫とならんでこの康にも大いに期待をよせて、できれば孫の革命派と康の変法派との提携を実現させようと努力する。だが、その努力は成功しなかった。もちろん、宮崎と康との関係は、最初からぎこちなかった。このことは、香港で康の亡命についてかれの弟子と交渉したことにかんする宮崎のつぎのような感想によくあらわれている。

「例の二弟子は、来つて其師の日本行に意あることを漏らせり。然も未だ曾て師の言として言はず。唯彼等の推測として此事を漏らせり。且つ彼等は、師の日本領事の来り見んことを望む意を漏らせり。然も師の托言として之を伝へず。謎の如くにして此事を諷するなり。支那流の筆法とは思へども、直情なる孫党や、洒落なる三合会派と交りたる後口には、余は何やら脂臭き感をなしたり。然り。余は実に隔靴搔痒の感に堪へざりき」

こうはいっているものの、その宮崎が「然れども余の彼に対する同情は深く、彼を携へて日本に至らんと欲する念や切なり」とつけ加えていることは、^⑤かれが康に大いなる期待をもっていたことをものがたっている。また康としても、日本の援助をうけて光緒帝を救いだして再起をはかることを考えていた。

こうして宮崎は、康をともなつて帰国した。一方、平山は北京より康の弟子の梁啓超をつれて帰国していた。そこで宮崎は、孫と康を会わせて両派を互いに提携せしめんと努力したわけだ。両派の提携は、当時はまだかなり弱体な革命派にとつてもものぞむところであつたはずだ。事実、孫は宮崎が康をつれて帰国するや、すぐさま康の意向を打診

するべく会見を申し立てている。宮崎は、その間の事情をつぎのようにいつている。

「翌日孫逸仙君来り訪ふ。余を介して康君と相見んと欲す。康君事に托して之を謝絶せり。夫れ孫君の康君を見んとするや、その主義方針は兎も角も、唯彼の現状に対して同情に堪へず、一たび相見て異郷托命の旅情を慰めんと
の意にして、実に古義照人底の心掛なりき」^⑥

だがこの会見は、康にことわられて実現しなかった。宮崎は、康が会見を拒否した理由をつぎのようにいつている。

「抑も孫君は之れを清帝の眼より見れば、無道の逆賊にして賞を懸けて其首を得んと欲する所のものなり。而して孫君の清帝を見ること亦不倶戴天の仇も啻ならず、機を見て一蹴して倒さんと欲する所のものなり。而して康君や、其事蹉跎して異郷に亡命せりと雖も、大局を挽回して再び皇上の世とならしめ、自ら之が黒幕となつて以て無前の大功を建てんことを夢想せり。故に行懸上の義理よりしても、世の嫌疑を恐るゝ利害の念よりするも、孫君と会見するの心を生ぜざりしは無理なからざるなり」

「康君の胸裡尚一つの夢想を蔵せり。蓋しまた孫君と近づくを欲せざる理由の一なり。何ぞや彼の自負心是なり。彼れその意中私かに期する所あり。以為らく、吾の地位を以て〇〇大臣を説かんか、彼必ず同情を吾に寄せて、兵を派して守旧党を牽制し、以て勢力を挽回するを允さんと、此の自負心や信頼の心より生ず。蓋し過信なり。而し過信の反動は失望となり、怨恨となる。亦人間自然の数理なり」^⑦

もちろん、宮崎はかれなりに康をたかく評価していた。かれはいつている。

「康や個人としては素より甚だ大ならざるべし。度量の狭量なる所もあらん、見識の熟せざる所もあらん、経験も足らざるべし。然れども艸莽一介の書生を以て、皇上の知遇を受けたるは事実なり。皇上を動かして、支那改革の志を起さしめたるも事実なり。また皇上を補佐して、変法自強の上諭を発せしめたるも事実なり。是が為めに四百

余州を震動せしめたるも事実なり。一時李爺〔李鴻章〕をして清廷に力なからしめたるも事実なり。不幸一敗して計画総て水泡に属せりと雖も、事實は何時迄も事実なり。而してその事実の進取的改善的なりしも亦事実なり。余は唯此一事を以て、李を小なりとして康を大なりとす。志世運の大局に寄与するにあり。その名譽心も亦之が為に動きたればなり」^⑧

宮崎はこういつて、つぎのようにつけ加えている。

「而して世の康を目して小なりと云うは、支那の現状を審にせざるが為のみ、比較的制定の度合を知らざるが為のみ。支那人物の払底せる、実に今日の如きはあらず。稍事情に通ずるものの棄てて之を顧みざらんとする、又野心家の乗じて以て大に為すあらんとする岐点は此処なり。而して人道を重んじ蒼生を懷ふ忠勇の士の起たんとする要点も、亦実に此処に存す」^⑨

それに加うるに、康をうけいれる日本人側に問題があることを指摘して、つぎのようにいつている。

「既にして曩に康君を珍客として歓待したりし我国の人士も、亦漸く其人物に飽き来りて彼を疎外せり。是れ或は康君に完からざる所あるに因るべしと雖も、また我邦人の、惚れ易く飽き易き病癰に根ざさずんばあらず」

このことばは、康に同情をよせる大隈重信の内閣にかわつて一八九八年（明治31）一月に出現した伊藤内閣（第三次）が康にたいして冷淡な態度をしめしたことへの批判でもある点で注目にあたいする。^⑩とすれば、宮崎は、革命派と改革派のちがいを十分に理解しながらも、両派のいずれをもたかく評価し、両派の提携が不可能であることを知りつつも、両派のいずれにも協力の手をさしのべたわけである。そして伊藤内閣の無理解にたいして（やがて康は日本の援助を断念して欧米に旅だつ）政府の態度を非難しているわけである。もちろん、伊藤内閣は、孫一派にたいしても冷淡であった。とはいえ、宮崎は、のちにシンガポールでもういちど両派の提携に努力する。

- ① 『三十三年の夢』一三九―一四〇ページ。
- ② 萱野長知『中華民國革命秘笈』（一九四〇年）六四ページ。
- ③ 『三十三年の夢』一四四―一四七ページ。
- ④ 同上、一四八ページ。
- ⑤ 同上、一六〇ページ。
- ⑥ 同上、一七二ページ。
- ⑦ 同上、一七二―一七三ページ。
- ⑧ 同上、一七四―一七五ページ。
- ⑨ 同上、一七五ページ。
- ⑩ 同上、一七三ページ。

Ⅵ 惠州事件前後の諸活動

孫と康の兩派の提携をはかって失敗した宮崎は、一八九八年（明治31）夏から翌年春にかけてはなすこともないままにすごした。だが孫は、一八九八年（明治31）春にぼつ発した米西戦争を契機としてフィリピンのアギナルドがふたたび独立運動をおこしたのを機会に、それと呼応して中国における革命運動を押しすすめようとする。そこでいよいよ宮崎は、みずから孫の革命運動に参加するにいたる。

フィリピンの独立運動を日本人が援助するきっかけは、一八九八年（明治31）六月末に、香港から革命委員会のマリアノ・ポンセが日本の援助を依頼するために来日したことだ。かれは、各界の日本人に会って、かれらが独立運動に好意的であることを知った。だがアメリカがアギナルドの共和政府を倒そうとする気であることがわかるにつれて、公然たる援助をえることが期待うすになった。それにもかかわらず、アギナルド政権とアメリカの対立は激化して、ついに一八九九年（明治32）一月に両者が武力衝突してしまった。武器を送ることは一刻の猶予も許されない。この

ときにポンセは孫と知りあった。孫はフィリピンの独立が中国の革命達成に好ましい結果をもたらすことを確信して協力を約した。^①そしてポンセを犬養や宮崎などに紹介し、犬養の世話で中村背山をとおしてひそかに援助武器調達の手はずがととのえられた。

中村と孫との連絡は、宮崎と平山がひきうけた。この平山は、信州出身の元軍人、近藤五郎ら五人とともに、直接フィリピンにのりこんで革命に参加すべく出発した。宮崎も、『九州日報』を手伝っているころに知りあった玄洋社の内田良平に計画を打ちあけて同派の援助をたのんでから、孫の依頼で南中国の情勢をさぐるべく香港に向けて出発した。その直後に、フィリピン向けの武器も、三井から払い下げられた布引丸で送りだされた。布引丸が門司を出航したのは、一八九九年（明治32）七月一九日である。^②だがこの船は、上海沖で沈没してしまつて、フィリピンへの武器輸送は挫折した。宮崎は香港行きの船が福州によつたさいに布引丸沈没の話を聞いたが、同船が援助武器の運搬船であることを知つたのは、香港へついでからである。また、フィリピンを脱出してきた平山から、独立運動が失敗して日本人の活動が徒労におわたつたことを知らされたのも香港においてであつた。

香港での宮崎は、畢永年らと連絡をとり、哥老会・三合会・興中会という三つの革命団体を打つて一丸として革命運動を強力に推進させるべく、三つのグループの連合体たる興漢会を組織させ、孫をその統領に推した。^③このことは孫が革命運動のヘゲモニーをにぎるにいたつたことを意味する点で注目にあたいする。具体的には、これが翌年の惠州起義の推進母体となるのである。

香港で三団体の合同に成功した宮崎は、上海経由で帰国するやただちに孫と会つて南中国の事情を報告するとともに、中国において新たな行動をおこすことを画策した。たまたま一八九九年（明治32）末から翌年春にかけて、中国では義和団がしだいに勢力を拡大し、各地に反帝国主義運動が波及して政情がきわめて不安定であつた。宮崎らはこ

の情勢を利用して行動をおこそうのである。そこへもってきて、当時の第二次山県内閣は、日清戦争後の財政的危機がいちおう克服され、しかも条約改正問題も一段落し、軍部大臣現役制をとってブルジョアジーにたいする藩閥の優勢を確保するなどしてからは、いちだんと大陸政策を積極化しようになる。しかも大養・宮崎・頭山三派は、すでにフィリピン独立支援で具体的な協力関係をむすんだ。この意味では、さきのフィリピン援助は、この三派の具体的協力関係のテスト・ケースであったわけだ。いうなれば、中国の革命運動はいまや日本の軍部・政党・財閥をはじめとして、文字どおり挙国的な支持をうける条件をあたえられたわけだ。

宮崎の計画は、このような好条件のもとで着々と準備された。その作戦本部は芝、愛宕山下の対陽館で、平山をはじめ、末永節・福本日南・内田良平・清藤幸七郎・島田経一・近藤五郎などで、主として東京と福岡で軍資金を集めた。ここで注目すべきことは、資金の大半を九州の炭鉱業者からえたことであろう。このことは、筑豊炭田の低質炭の販路が中国中部および南部であったがゆえにかれら経営者が玄洋社の大陸活動を財政的に援助していたこと、宮崎が内田らの玄洋社系の人びとはじめて実際行動面で協力する点で注目にあたいする。さらに、友人ではあるが「支那占領主義者」というレッテルを付し、主義・主張を異にするという理由で従来協力しなかった荒尾の東亜同文会系の清藤や軍人出身の近藤らと幅広く提携・協力していることも、注目にあたいする。こうしてまず平山が香港に先発し、ついで孫文・鄭士良・陳少白・清藤・内田・宮崎の六人が、一九〇〇年（明治33）六月はじめに香港へ向かった。一行はその船中で会議をひらいて具体的なプランをねった。そして、まず広州の近くの三州田の山寨に同志を集めるとともに、香港より孫はサイゴンを経てシンガポールに向かい、宮崎らはシンガポールに直行して同地で孫といっしょになって香港へもどり、三州田に密行することになった。そのさいに宮崎は、シンガポールにいる康有為と協力すべきことを提案する。他方、孫文は出発前に広東の劉学詢から連絡があつて、当時両江総督の李鴻章が広東・広

西両州の独立を画策して孫と提携したがっていることを聞いていた。その当時の孫は、康や李と提携することに賛成だったようである。

香港についた宮崎は、内田・清藤の両名ともに出迎えにきた中国の砲艦にのりくんで広東へゆき、劉学詢と会見した。そのときの会見の内容はつまびらかではないが、出席者は孫と康と李の提携を実現させてたとえ広東・広西両州だけでも帝国主義勢力の圧力と不安定からまもるという点で意見の一致を見たとのことだ。^④一説によると、宮崎は康の暗殺をはめかし、劉がそれをよろこんで孫と李の提携を主張したとのことだが、これは『三十三年之夢』の船中のかれの提案と矛盾する。もちろん、かつて金玉均がおびきよせられて暗殺されたことを考えると、孫が劉の提案を警戒していたことは十分考えられる。とはいえ、とにかく香港にもどった宮崎が孫に一部始終を報告してから、清藤・内田の両名とともに康のいるシンガポールに向かい、同地で孫と福本の一行を待つとともに、康と会見せんところみる。

宮崎がシンガポールにいったのは、いったいなんのためであろうか。宮崎にいわしむれば、もちろん「此地元と日人の知人なしと雖も、余が相識康有為は茲に潜居せり。而してその一派と連絡するはまた此行の一希望なりき」^⑤であった。だが康はイギリス当局の保護下にあり、丁重に手紙で会見をことわってきた。イギリス側が厳重に保護しているので容易に会えないというわけだ。そしてかれの弟子を通じて交渉してもすこしもらちがあかない。もちろん、康派にしてみれば、宮崎が康を暗殺しにきたのではないかというデマもある。そこで宮崎はそのことをもふくめて康に自分の所信を批擲した手紙をだしたが、何日待っても会おうとしない。内田は、香港からなかなかやってこない福本と孫を待ちきれず、さらに康の態度に業を煮やして、とうとう日本に帰ってしまった。それでもなお宮崎は、孫との約束があるし、康と会うこともあきらめきれないで、清藤とあとにのこった。一方、康は康で宮崎があまりにもしつ

こく会見をせまるので警戒心をたかぶらせ、とうとうたまりかねてその悩みをシンガポール警察当局に訴えた。これが、宮崎の孫と康を提携させようとする努力にたいする康の回答であった。宮崎と清藤の二人は、宿舎にふみこんできた警官によって監獄にひきたてられてしまった。宮崎はこの失敗によって革命派と改革派を連合させることを断念して、これいごはひたすらに革命派を援助する。

逮捕された宮崎らに不利だったことは、所持品のなかから二本の日本刀と三万両の大金がでてきたことだ。そのためになかなか暗殺の嫌疑が晴れなかった。だが、新聞で二人が逮捕されたことを知った同地の日本領事が青木外相に連絡をとって刺客でない保証をとり、^⑦他方でおくれて香港から到着した孫文が友人であることを証言するなどして、六日間の牢獄生活ののち、孫らとともにシンガポールより五年間追放という処分をうけて佐渡丸で同地を退去させられた。

数日後に佐渡丸は香港に入港した。宮崎と清藤は、中国内地進入のために同地の形勢をうかがうべく上陸して、同地にいる平山と近藤を訪ねたが、日本の領事からシンガポール追放処分は香港にも適用されることを警告されて、やむなく船にひきかえした。そして船でも正式にイギリスの警官から上陸できない旨をいわたされた。そこで船中でいろいろと策をねった結果、孫文の提案で、香港での準備の全権は福本にまかせ、機をみて挙兵するが、挙兵に当たっては鄭士良が大将で、近藤と揚飛鴻が参謀、民政の総裁は福本、副総裁は平山になるなどのことをきめ、他の日本の同志たちも鄭を助けて内地に進入することになった。^⑧けっきよくのところ、六月はじめに日本を出発した宮崎は、こところざしとちがつて香港、シンガポールとまわりながらも、大半を船上ですごし、しかも一八九六年（明治29）らしい第二の足場としていた香港からも追放されて、孫とともに帰国する。もともと、孫は李鴻章との話しあいを期待していたが、これが李の北上で不可能なることがあきらかになり、ついに挙兵を決意したようので、船中で挙兵の

計画をねるとともに香港政府に挙兵のさいの援助ないし中立を申し立てている。

孫とともに帰国した宮崎から挙兵の計画を開いた内田は、四〇人あまりの部下を集めて、鄭の軍に参加することを予定した。ところが、ちょうどそのころに、近藤と福本が突然香港から帰ってきた。このために孫はいささか失望したようだが、上海を中心とする哥老会の連中と連絡をとって鄭らの行動に呼応する新たな行動をおこすことをくわだててか、日本から出発する内田とその部下や上海から南下せんとした末永節らの出発を中止させて、みずから内田ら二、三人とともに上海へ向かった。しかし、当時漢口で蜂起せんとした改革派の唐才常一行の計画が七月末に発覚して警戒がきびしいために、同地で内田らとわかれていったん日本にかえり、清藤とともに台湾へわたった。宮崎は、内田が孫とともに台湾にゆかなかった理由を、「心を朝鮮に傾けて之を肯ぜず」^⑨としている。たしかにその当時の内田は朝鮮に関心をいだき、義和団事件の直後に黒竜会をつくる。だがこれは、唐一味の失敗によって揚子江沿岸付近で新たな行動をおこすことの不可能なことを知ったかれが山田良政とともに、唐らを処刊した両湖総督の張子洞と両江総督の劉坤一、北上の途次で上海に滞在している両広総督の李鴻章の三人を暗殺する計画をたてて、東京から刺客を呼びよせようとしたことをした孫文がこれに反対して、意見が対立したためである。^⑩このことは、孫とその協力者との仲間割れとして、注目にあたしいよう。

孫が台湾にわたったのは、鄭は挙兵すれば厦門^{アモイ}付近に進出し、自分は台湾から密航してそれに合流せんとする佐渡丸上でのかれの最初の提案に合致する。だがこの台湾ゆきには、密航以上の期待があった。というのは、さきの山田良政がいぜんとして中国の革命運動に関心をもち、平岡浩太郎の手紙をもって台湾を訪問して時の台湾総督の児玉源太郎と民政長官の後藤新平に孫を援助してくれるようにたのんでいる。^⑪じつは孫は、このことを聞いて台湾へとんでいったのである。そのころ児玉や後藤らは、列強が義和団事件によって北中国に関心をうばわれているのを利用して

福建省の廈門占領を意図し、鄭士良の挙兵に呼応して台湾から廈門に上陸せんとする孫の計画を黙許した。そこで孫は、この計画を実行に移すべく清藤を帰国させて、平岡その他に資金の増額を依頼する。^⑩ただし、宮崎は相変わらず東京にいて、このこととはほとんど無関係であった。

児玉と後藤の廈門占領計画は、前台湾総督、桂太郎の南進論を具体化したもので、一九〇〇年（明治33）七月に、義和団の反乱が浙江省から福建省にまで波及したのを契機として実行に移された。すなわち時の海相山本権兵衛は、八月一日、和泉艦長に高千穂・和泉・筑紫の三艦に廈門出動を命ずる秘密訓令を発した。ついで陸相桂太郎は、八月二四日、児玉に廈門の和泉艦長より出兵の要請がありしだい出兵すべきことを訓令した。そして同日、和泉の陸戦隊が上陸し、さらに台北第一旅団の第二大隊が廈門に向かう。だが、八月八日に、この計画は、イギリス・フランス・ドイツなどからの強硬な抗議によって中止をよぎなくされてしまう。^⑪

一方、鄭士良は、広東の三合会のメンバーを中心に、八月には約六〇〇名の人員を集めて新安県東南の三州田の山寨にたてこもった。そのうちに清朝政府はこのことを聞いて、一〇月はじめに惠州守備隊を出動させたが、反乱軍はたちまちこれを撃退し、付近の住民に歓送されてあなどりがたいいきおいになった。この知らせを聞いた孫は、敵部隊との接触をできるだけさけて廈門に向かうことを命じ、他方で待機中の宮崎に武器弾薬の補給を依頼した。孫の命令を受けた鄭は惠州を占領し、各地で参加した農民を加えて数千名の反乱軍を擁しながら、ほとんど敵と遭遇することなく廈門へとすすんだ。だがその間に、清朝は優秀な部隊を派遣して、まず香港からの補給路を断ち、反乱軍をしだいに包囲した。そのために、反乱軍の弾薬と食料は不足しはじめる。そこへ一七日目に、孫からの伝言で日本人の援助も武器弾薬の入手も見こみうすになったことがわかった。これは、孫の依頼を受けた宮崎が、さきのフィリピンの独立運動支援のために買った武器弾薬の残りが中村背山の背信のために入手不可能になったことをしらせてきたか

らである。そこで状況が不利なことを判断した鄭は、一部の反対を押しきって部隊の解散を命じ、ついにこの第二の挙兵（いわゆる惠州起義）も失敗に終わった。反乱がはじまったのは一〇月八日で、終わったのは同月二五日である。^⑭

こうして第二回の蜂起も成功せず、孫は一九〇一年（明治34）はじめに、むなしく台湾より横浜にひきあげてきた。だがまだ望みをすてなかった孫は、宮崎を上海に派遣して情勢をさぐらせたが、革命が不可能なことをした宮崎は、滞在わずか二日で上海からもどってきた。そしてその後の革命運動は、一九一一年（明治45）のいわゆる辛亥革命にいたるまで、もっぱらに方式の再検討と組織の強化に集中される。とともに、日本側では、わが国の帝国主義への移行にもなって政府の援助を媒介とした協力関係はなりたなくなり、しだいに内部分裂をきたして中国の革命運動にたいする貢献度は急速に減少する。

① Jansen, op. cit., PP. 69—70.

② Ibid., P. 71.

③ 『三十三年の夢』一九八ページ。ただし宮崎は、「綱領三則を定め、鳩血を啜りて之を誓ひ、印章を作りて孫君に捧ぐ。実に是れ空前の快事なり。但余未だ其詳を言ふ能はざるを恨む。事他人の身上に関するを以てなり」というだけで、同会の詳細をのべていない。

④ Jansen, op. cit., P. 87.

⑤ 吉野作造・加藤繁『支那革命史』（一九二二年）五五ページ以下。一説によると、劉はその翌日に、宮崎らに孫と康に手わたすように数万両の大金をとどけている。黒竜会『東亜先覚志士紀伝』（一九三三年）上巻六五六ページ。

⑥ 『三十三年の夢』二一三ページ。

⑦ Microfilms of Foreign Office Files, M.T. 1. 6. 1. 4. 3, Exp. 356, July 16, 1900 (Jansen, op. cit., P. 245).

⑧ 『東亜先覚志士紀伝』は、平山が外務、畢永年が内務、揚が財政、原禎が参謀をそれぞれ担当したとしている。同書、上巻

六六五ページ。

⑨ 『三十三年の夢』二五五ページ。

⑩ Jansen, op. cit., PP. 93—94. および『東亜先覚志士紀伝』上巻六六九—六七二ページ。

⑪ 吉野・加藤、前掲書、六九ページ。

⑫ Jansen, op. cit., P. 94.

⑬ 藤井松一「日露戦争」『岩波講座・日本歴史』第一八巻（一九六三年）一三三—一三四ページ。

⑭ 菅野、前掲書、六六ページ。ただし、『三十三年の夢』は、一〇月六日にはじまった旨の電報を孫文からうけとったとして
いる。同書、二五六ページ。

Ⅶ 革命団体の統一と内部分裂

惠州事件の失敗には、あきらかに協力関係の内部矛盾と混乱が露呈されていた。失敗の直接的な原因のひとつは、中村背山の背信によって日本から武器弾薬を補給しえなかったことであろう。この中村の背信を契機として日本人協力者の相互間に不信の念がたかまったことは否定できない。一九〇一年（明治34）に宮崎が孫文の命をうけて上海へいって来てもどってきた直後に、犬養が相互の不信をなくするために一席をもうけた席上で、宮崎と内田良平とが中村の背信をめぐって罵倒しあい、なぐりあいのけんかまでしたことは、このことを象徴するできごとといえる。というのは、惠州蜂起は、さきにのべた児玉と後藤の厦門占領計画の挫折によって、いちはやくその失敗が運命づけられていたともいえるからだ。孫文じしんのいうところによると、事件のぼつ発後に児玉が条件付きの援助を確約している。①ところが、児玉と時の首相山県とは意見が対立し、しかも山県は児玉が帰京する以前に辞職してしまった。その結果日本側の公然たる援助は、列国の抗議をきっかけとする政府部内の不統一と伊藤を中心とする政友会との政争のために立ち消えとなり、孫はあたら好機をむぎむぎと失う結果になったわけだ。

山県内閣について成立した伊藤内閣の関心は、もっぱら北方のロシア問題に向けられた。そして資本主義の確立と帝国主義への移行によって、ロシアとの開戦が不可避の方向につきすすむ。それにともなって、協力関係者のあいだにも微妙な主義・理想のちがいが生じてくる。さきの背山事件をめぐる宮崎と内田のけんかも、そのあらわれといえよう。事実、一九〇〇年（明治33）以後の一〇年間には、一九〇二年（明治35）の日英同盟の成立、一九〇四―五年（明治37―38年）の日露戦争、一九一〇年（明治43）の日韓合併などによって、従来犬養・宮崎・頭山三派が共有していた理想・理念は大いに弱められる。他方、孫らの中国人革命家たちは、日本政府の援助がなくなることによって独自の資金づくりと組織化運動にとりくむことになり、そのことをおしてそのころようやく日本にあらわれはじめた社会主義に接近しはじめる。

頭山一派がしだいに膨張主義に転化してゆくのに反して、宮崎はいぜんとして自由主義的な心情で孫に接した。だが、伊藤らの政友会が政権の座につくにおよんで犬養と権力との結びつきはうすれてしまい、このことは必然的にこれまで政府の援助の仲介をする面で活躍した宮崎の存在意義を失わしめて、孫のたんなるメンセンジャー的存在たちしめてしまう。宮崎が一九〇二年（明治35）三月に、中国雄飛のならなかった失意をいだきつつ桃中軒雲右衛門の弟子になって、再起の日を夢みつつ、同志の糾合と資金の調達をかねて浪曲師として雲右衛門とともに全国各地を巡業するのも、その間の事情を如実にしめしている。『三十三年之夢』の記述はここで終わっている。

一方、一九〇〇年（明治34）末から翌年にかけては、武漢の自立軍蜂起や惠州蜂起に敗れたために多くの中国人が日本に亡命してきて東京に集まり、在日中国人留学生と提携していろいろな団体をつくった。孫は、はじめのうちはしずかに横浜で暮らしていたが、主として泰力山や章炳麟らとまじわって、広東独立協会を中心に留学生のなかの革命分子の結集につとめた。このことは、興中会に多数のインテリが加入して、その組織が質的に転化するきっかけと

なる。^② そのかたわら、孫は惠州の失敗にかんがみて、軍事的用兵に関心をいだき、南アフリカのブーア戦争に魅せられたかれはゲリラ戦を中国に採用すべきだと考えて、軍事科学一般を同志に教育する必要性を痛感する。そこで一九〇三年（明治36）に安南総督の招待でハノイに旅行して日本にかえつてくると、清朝政府が日本の軍学校への留学生数を制限していることを知って、ひそかに青山に独自の革命軍事学校をもうけたりする。^③ ついでその翌年には、ハノイ旅行と同じく各地の華僑の再組織を主眼として、ハワイをふりだしに、二回目の世界旅行にでかける。

一九〇五年（明治38）七月に日本へかえってきた孫は、すぐさま宮崎に黄興を紹介された。黄興は華興会の中心人物で、前年の長沙拳兵に失敗して、宋教仁とともに日本に亡命中で、雑誌『二十世紀之支那』を刊行するなどして留学生の信望を集めていた。黄に会った孫は革命諸団体の統合の必要を説き、両者のあいだで新しい組織について意見の一致をみた。ちょうどそのころは日露戦争の終幕に近く、アメリカやフランスなどの仲介で日本とロシアとのあいだに和平交渉がはじめられたばかりで、留学生のなかには日本の勝利に刺激されて革命勢力をもちたてようとする空気がみなぎっていた。七月一九日に横浜港についた孫文を約一〇〇名の留学生が出迎えたことは、そのことをよくしめしている。こうして孫が来日して一〇日あまりのうちに、赤坂松町の内田良平の家（黒竜会本部）において、新党結成の準備会がひらかれ、興中会・華興会・光復会・日知会などの代表者と内田良平・宮崎など七十余人があつまつた。その会議の結果、新しい組織を中国革命同盟会（略称中国同盟会）とすることになった。ついで八月一三日には麹町区の富士見楼で留学生主催の孫文歓迎会がひらかれて、一三〇〇名もの出席者を集めた。宮崎や末永その他の日本人が歓迎演説をやり、孫は「中国は共和国を建設すべし」と題した講演をおこなった。そして同月二〇日、赤坂霊南坂の代議士坂本金弥宅において一〇〇余名が集まって同盟会の成立大会がひらかれ、革命諸団体の統一がなった。^④

ここで注目すべきことは、同盟会が誓詞に「驅除鞭虜、恢復中国、創立民国」とならんで「平均地権」を採用したことであろう。孫がここで土地国有化のアイディアをもつにいたったのは、ヘンリー・ジョージの単税論の影響を受けていることは否定すべくもない。その点で、当時横浜の中国人学校である大同学校で教鞭をとり、孫文とも親しかった宮崎の兄民蔵の感化が多分にあるのではあるまいか。というわけは、民蔵はやくから土地問題に関心をもち、ヘンリー・ジョージの線にそって土地国有化を提唱した先駆者のひとりで、一九〇六年（明治39）に『土地均享・人類の大権』^⑤という本を出版したりしているからである。また同盟会の成立大会には、正規の会員としての資格のない非中国人は出席できなかったが、宮崎・平山・萱野の三名は同盟会の会員として出席している。そのさいに、二名の日本の社会主義者（北一輝と和田三郎か）が参加したい旨を申し入れたのにたいして、宮崎と平山は日本政府が孫を援助していることを理由に拒否するよう忠告したとのことである。^⑥

これらのことは別に、革命団体の統一にたいしてふたたび宮崎一派と頭山一派が協力していることは注目にあたしい。なぜなら、同盟会のできるころには、かつて日露開戦時に対露強硬論をおおっていた頭山満・内田良平らが、対露同志会にかえて講和問題同志連合会をつくって、講和条件にたいする国民の不満をさかんにかきたてていたからである。そのかれらが同盟会を援助したのは、すでに膨張主義の立場からの利用を考えてのことではあるまいか。内田邸における準備会の席上で「対満同志会」の名称を主張するものがあつて孫文が「排満」とともに「専制廃除と共和の創造」の必要性を強調したとか、「平均地権」の取り消し要求にたいして反論したなどということは、孫・宮崎らと頭山派との微妙な意見の対立を反映しているといえるかもしれない。このことは、その後の革命運動の進展にもなつて、日本の政府をはじめ政界人や軍部が中国の共和主義が日本人一般に伝染することをおそれ、頭山もそのような危惧の念をもっていたことと一脈相通じる。

東京で同盟会が発足すると、中国内外の各地で支部組織が確立し、加盟者もしだいに増加して一年足らずで一万をこえるにいたった。また発足と同時に、『二十世紀之支那』が機関誌となり、一月に『民報』と改題して創刊号がだされた。同誌はのちに三たび日本へ亡命してきた章炳麟が主宰となり、そのまわりには魯迅その他の留学生が集まって、発行部数も四、五万にのぼり、ひそかに中国本土にもちこまれて大きな影響をあたえる。それと並行して、宮崎・萱野らも一九〇六年（明治39）九月に『革命評論』を創刊して、革命思想を鼓吹する。同誌の同人に北一輝や幸徳秋水がなったことは有名である。一方、孫一派の『民報』にたいしては梁啓超らの改革派の『新民叢報』が共和革命思想を排して清朝の下に国家改造を断行すべきことを主張して両派のあいだにはげしい論争がおこなわれた。とりわけ一九〇六年一月二月はじめに、孫文が『民報』一周年記念会の席上で三民主義と五権憲法をあきらかにするにつれて、両派の論争はいちだんと激化した。だが結果的には、これによつて孫の革命理論が体系づけられて、中国内外でいっそう多数の共鳴者を与えることとなり、革命派はもはや中国において全国的な勢力となるにいたり、まもなく各地で武装蜂起が開始される。

しかし日本にある革命派はたんに改革派の攻撃のみならず、内部分裂にも悩まされた。そのきっかけは、一九〇五年（明治38）末の留日学生取り締まり規則をめぐる事件で、留学生がそれに反対するために同盟休校したことへの『朝日新聞』（一月七日付け）の批評をいきどおつて、『民報』の編集にたずさわっていた陳天華が大森海岸に投身自殺をしたのちに、留学生が帰国派（各校連合会または会館総会）と帰国反対派（維持留学界同志会）にわかれて対立したことである。^⑧この両派は、民族意識の面であきらかに意見がちがい、それが日本についての評価にもからんで帰国問題を契機として公然と対立するにいたったのである。その意味では、陳は両派の板ばさみになったあげくに死をえらんだといえる。陳じしんも「絶命書」のなかに、「近人親日を主張する者あり、排日を主張する者あり。鄙人

おもへらく、二者みな非なり」といつている。^⑨じつは、当時の日本は、日露戦争によってロシアを満州からおっばらうと、こんどは満州を足場として中国侵略をねらおうとする。しかも日露戦争によって強国の地歩を獲得したからには、いまさら亡命者の革命運動を援助して利用するというのは必要はなくなった。このような日本の変化は、その後も革命派に影響をおよぼさずにはいなかった。

黒竜会の記述によると、孫が一九〇七年（明治40）一月に東京での講演で、革命のねらいは満州王朝の打倒であつて、日本が援助の代償として長春以北の地を入手しても異議を申し立てないことをほのめかし、このことが清朝政府の耳に入つて、日本に孫の追放を要請する口実に利用された^⑩のことである。その結果、同年二月に、中国の要請をうけた伊藤博文が内田良平と相談して、革命派との関係を持続したまま、孫が自発的に日本を離れる形式をとることとし、けっきょく内田は外務省の山座円次郎から孫を追放するかわりにかれにわたす七万円の金をうけとつた。^⑪孫はそのうち六万円をうけとつて、残りを同志や友人との別れのための盛大な宴会についやした。そのほかに、証券業の鈴木久五郎からも一万円が孫にわたされた。こういう取り引きがあつたことをまったく知らぬ宮崎は、政府の無知をいたく憤慨した。^⑫その直後に孫は、胡漢民、汪兆銘、萱野らをひきつれてハノイにわたつたが、孫が日本政府から多額の餞別をもらつたり、鈴木から金をもらつたことがわかれると、章炳麟・宋教仁らが憤慨して孫を攻撃した。この問題は、相つぐ蜂起の失敗と重なつて大きくなつたが、黄興の調停でいちおう収まつて、辛亥革命まではなんとか統一の形を保つとはいへ、内部的な対立となつてくすばりつづけた。とりわけ、孫が追放されてからの東京では、章炳麟・張繼・劉光漢らは一九〇七年（明治40）の夏には反帝国主義をスローガンとする亜州和親会や社会主義研究会をはじめ、幸徳秋水を招いて無政府主義の解説を聞くなどしている。^⑬さらに各地での蜂起の失敗は、革命派の内部分裂を

たかめた。とくに一九〇七年（明治40）の広東省黄岡の役と六月の惠州七女湖の役の失敗は、孫と日本人同志との対立さえもひきおこした。すなわち孫は、九月に宮崎に手紙を書いて、平山周・北一輝らを非難するとともに、他の同志や東京の中国人グループにも秘密裏に、日本での武器弾薬と資金調達の全権をゆだねる委任状を添付した。^⑭これにたいして北は、「支那浪人らが置酒高歌して、当時のお廢銃払下運動をもって大いに東亜の大策に参画しつつある残酷なる滑稽」とこきおろしている。^⑮

こうしてハノイに移ってから、孫は池亨吉らとともに鎮南関攻撃に参加したりするが敗退し、黄興また欽廉や雲南方面でたかかったが、利あらずしてヴェトナムにもどるなどして、一九一一年（明治44年）までは、革命派は内部の不統一のためにしだいに弱められた。その間に孫文は、清朝の要求でヴェトナムより退去を命ぜられてシンガポールに移り、一九〇八年（明治41）に東南アジア各地を歴訪するとともに、翌年には軍資金調達の目的で三回目の欧米旅行に出発した。一九一〇年（明治43）六月にかねはアメリカより横浜にもどってきたが、日本政府がかれの在留を拒否したためにペナンへ移り、同年末にまたヨーロッパへゆき、翌年はじめにアメリカへいった。一〇月に武昌で革命（辛亥革命）がおこったことを知ったのは、コロラドのデンバーにいたときのことである。その間に、孫は宮崎と萱野にはたえず連絡をとり、日本への再入国の可能性を案ずるとともに、犬養と頭山によろしくと書いて、日本側の援助への期待をはめかす手紙をたびたびおくっている。^⑯

孫の期待に反して、日本側からの援助は皆無であった。原因は孫があまり日本におらず、協力的な日本人が宮崎や萱野のような少数の民間人にかぎられ、しかも日本政府がまったくかれの革命運動を援助しなくなり、むしろそれに反対していたことにある。一九一〇年（明治43）の幸徳事件からもわかるように、日本政府が共和思想のもち主と考えられる孫文らを支持せず、危険視したことは当然考えられる。それに輪をかけたのは、一九〇八年（明治41）に南

中国一帯で日本商品のボイコット運動が展開されたことであろう。他面、一九一〇年（明治43）の日韓合併は、中国人一般に日本が大陸にたいする侵略的意図を有していることをまざまざとみせつけた。しかもこれは、伊藤博文と内田良平の合作によるもので、いわゆる頭山一派はもっぱらに満韓経営の推進をはかり、孫を援助するどころではなかった。しかも宮崎や萱野はあくまでも孫に協力的なかどで危険人物視され、まったく孤立した状態におかれていた。宮崎の家はたびたび探索されて、孫からの通信は没収され、外務省にまわされた。事実、孫や宮崎らの行動は国外たると国内たるとを問わず密偵をつかったり、郵便物の検閲、聞きこみなどの手段を講じて細大もらさず調査され、外務省や内務省に報告された。^{①②}

辛亥革命がおこるまでの孫や宮崎らの状態はこのようなものであった。孫はもっぱら華僑の組織化と資金の調達のために世界をかけめぐり、宮崎は政界からの孫援助がないままに孤立して生活難におちいった。もちろんその間に、宮崎は千島遠征で有名な郡司成忠や倉地鈴吉などの協力をえて中国の革命派に武器弾薬をおくり、一九一〇年（明治43）五月ごろには上海へいったりもしている。一方、日本政府としては、日露戦争いらい、ますます力の外交に自信をもつて中国にたいし、満州王朝のもとでの穩健な立憲君主制の樹立による弱国中国の出現を理想とする。一九〇九年（明治42）八月に、ときの桂内閣（第二次）が満州の安奉線鉄道敷設交渉で清朝政府に最後通牒をつきつけて、九月八日に満州における領土的・商業的利権を約束せしめる日清協約を成立せしめているのがその好例である。このような状況は、宮崎や萱野らの孫援助にたいする希望を失わせるに十分であった。

① Jansen, op. cit., P.103.

② 野沢豊『孫文』（一九六一年）七九—八〇ページ。

③ Jansen, op. cit., PP.115—116.

- ④ 野沢、前掲書、九五―九七ページおよび、さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』（一九六〇年）四一五―四一六ページ。
- ⑤ 吉野作造編『明治文化全集』第二卷（一九二九年）二九九―三二九ページ所収。
- ⑥ Jansen, op. cit., P. 118 and P. 251 n. 40.
- ⑦ 野沢、前掲書、九六ページ。
- ⑧ 詳細は、さねとう、前掲書、四六一―四九四ページ。
- ⑨ 同上、四九五ページ。
- ⑩ 『東亜先覚志士紀伝』第二卷四三五―四三六ページ。
- ⑪ 葛生能久『日韓合邦秘史』第一卷（一九三〇年）付録一二ページ。
- ⑫ 『東亜先覚志士紀伝』第二卷四三七ページ。
- ⑬ 竹内善作「明治末期における中日革命運動の交流」『中国研究』（一九四八年九月号）七八ページ。
- ⑭ 外務省調査部訳『孫文主義』（一九三五年）第二卷五九〇ページ。なお、委任状の実物の複写は、Jansen, op. cit., P. 118 についている。
- ⑮ 野沢、前掲書、一二二ページ。
- ⑯ Jansen, op. cit., P. 126 and P. 252 n. 73.
- ⑰ Ibid., PP. 128―129.

VIII 辛亥革命以後の協力関係

一九一〇年（明治43）十一月に、孫文はマライ半島のペナンで黄興・趙声・胡漢民らと会議をひらいて、全党をあげて清朝に決戦をいどむことに意を決して、各地の同志に檄をとばした。翌年春の黄興による広州蜂起（黄花岡事件）はその第一弾で、これは失敗に帰したとはいえ、それにつづいて八月には鉄道国有化反対運動が全国的にはげしくなり、九月に四川省で武装蜂起がおこり、また武昌でも一〇月に武装蜂起がおこって、革命が本格化してきた。

武昌蜂起の成功は、宋教仁から電報で宮崎や萱野に知らされた。これは、かみらにとってはまったく夢想だにして

いなかったできごとであった。そのとき萱野は古島一雄らの援助でさつそく僧侶に変装して中国へ向かい、一一月の漢陽のたたかいは黄興とともに参加している。だが貧困と病気に悩まされていた宮崎は、ひと足おくれて出発し、いったん上海にいったあと、香港へ行って一二月末にイギリスから帰国する孫文を池享吉とともに出迎えた。このときの孫は、もはや以前のように日本の政策に楽観的ではなかった。このことは、ロンドンでイギリス政府に日本の対清援助の抑制を依頼したり、反日的なアメリカ人のホーム・リーを軍事顧問としてつれてかえったことからあきらかだ。^①

一二月二四日に上海へついた孫文は、二九日に南京でおこなわれた大統領選挙の結果当選し、翌年一月一日に、臨時大統領に就任し、国号を中華民国と改めた。だが、孫の地位はきわめて不安定なものであった。しかも日本からは犬養・頭山などのかつての大スポンサーまでがじきじき中国にのりこんできた。犬養は、一二月一九日に上海につき、翌年一月に一度帰国するが、三月二六日まで上海に滞在した。また頭山は、一二月二三日に東京出発をして上海に向かい、翌年四月一三日までずっと同地に滞在した。その間、両者はいずれも数回南京にいつて孫に会っている。もちろん、孫はそれらの日本人協力者に会ったことをひじょうによろこんだが、かれらの援助は革命遂行のためにはありがためいわくな結果をもたらした。そのひとつは、孫が軍資金をえるためにかれらのあつせんで漢冶萍煤鉄公司を利^②用して三井から多額の借款をえる交渉をしたことである。このことは、同公司の省有を主張する黎元洪らの案と対立し、さらに張謇らの立憲派の反対にあうなどして、革命政府の内部分裂をふかめるとともに、一般に日本の経済的進出という点で疑念をいだかせ、清朝側の袁世凱との妥協をはやめて反革命を助長する。もうひとつは、孫に袁世凱と妥協するなと忠告して、中国人に不信の念をいだかせた。というのは、民軍の無統制と軍資金の欠乏のために袁を撃破するだけの力のなかった革命政府にとっては、その忠告は中国を南北に分割する案にひとしかったからである。そ

れに他方では、日本政府が革命にたいして干渉にのりだすことが危惧された。

そのうちに、革命派内部の混乱が増大するにつれて、日本にたいする不信の念はますますばかりであった。しかも袁は革命軍とはちがつて近代的装備を誇る精鋭部隊をもっている。このような状況のもとで、孫もついに袁と妥協する決意をかためた。そして孫と袁の交渉の結果、二月一三日に清帝退位の通告が発せられ、翌日孫は参議院に辞表を提出し、それにかわって袁が臨時大統領になることとなった。他方、頭山や宮崎たちは、この南北和平の交渉がおこなわれていることをまったく知らなかった。革命派の連中は、孫をもふくめて、だれひとりとしてこのことを日本人に話さなかったのである。まったくのつんばさじきにおかれていた頭山、宮崎、萱野は和平交渉のことを聞いて、いそいで南京へ行って孫に忠告したが、らちがあかず、和平交渉はいぜんとして続行されて、袁の勝利が確定した。しかも日本政府は、列国に伍して袁の新政府への借款団に加わるにおよんで日本人たちの工作の失敗は決定的になった。こうして宮崎らの革命援助の努力は、またもやどたん場で失敗に帰してしまった。そしてかれらが熱心に孫を支援すればするほど、中国人のあいだに不信の念を増大させる^③。これこそは、中国革命を援助しようとする日本人協力者と中国革命それ自体との遊離を意味した。宮崎たちの真意がいかなるものであれ、一般に日本人協力者たちは、この時点において、はつきりとみずからの指導を強要して失敗したのである。そのかぎりにおいては、もはやその協力関係がアジア連帯意識にもとづくものではありえなくなったことは明白である。とともに、宮崎一派のような存在は、いまや強国たるの地歩を確保した日本の政府・財界・軍部などの大陸における特殊権益の擁護と獲得にたいする関心の増大にともなうて、それ自体の独自の存在意義をもちえなくなった。かれらはまったく特殊権益への要求を前提に援助の手をさしのべようとする人びとのメッセンジャーでしかなくなってしまふ。

一方、一九一二年（大正元）八月に北京へ行って袁と会談し、九月に全国鉄路督弁に任命された孫文は、宮崎を先

行させて日本にわたり、翌年二月一三日から三月二二日まで在日して桂太郎、犬養毅らをはじめとして、政界・軍部などの要人と会談し、日本の指導者層との結びつきを更新した。とはいえ、この結びつきは、袁政府を代表する一介の要人としての孫にたいする日本の各界代表との儀礼的なものにすぎず、広範な層から歓迎されたとはいえ、かつての革命運動にたいする協力関係のような強固なものではなかった。他方、当時の日本政府は、満蒙における特殊権益の擁護のほかは南部への経済的進出をはかること以外にはつきりした中国政策をもちあわせていなかった。このことは、七月におこった第二革命によくしめされている。日本国内の世論はこの反乱に好意的であったが、本格的な戦闘は七月一二日から二五日までという短期間のもので、二カ月足らずのうちに袁の圧倒的勝利のうちに幕を閉じた。孫と黄興は、いちはやく八月はじめに日本に亡命し、犬養や頭山のおかげでかくまわれる。六カ月前に使節として来日して大歓迎をうけた英雄のあわれな入国ぶりであった。そのころ、犬養や頭山らは、「対支那問題同志会」などをつうじて、政府に積極的な中国政策の推進をせまり、政府もいよいよ袁を正式の交渉相手として強硬な中国政策を展開するにいたった。そしてその交渉は、第一次大戦を契機とする対華二カ条要求を生みだすのである。

こうしたなりゆきのうちに、孫文の日本における支持層はしだいに小さくなっていった。かれは頭山にかくまわれていたものの、もはや頭山の脳裏には政府をして現存する袁の中国政府を相手に膨張政策を展開せしめること以外にはなかった。孫を訪問した日本人は、宮崎や萱野は別としても、その大半が経済的利権に関心をもつ人びとにすぎなかった。しかも孫のほうでも、求められぬままに、もはや日本人からの援助を期待しようとはしなかった。このことは、一九一四年に、サンフランシスコのパレス・ホテルの経営者デイトリックに、中国における政府直営の百貨店経営を委託する委任状を交付していることでもわかる。^④孫がこのような思いきった提案をしたことは、かれが日本人から援助をうける確信がなかったからであろう。翌年の春に反帝制運動を機会に反袁闘争を積極化せんとしても、それ

に関心をもって協力せんとする日本の在野勢力はごくわずかなものであった。いまや政界・財界・軍部は、革命運動成功の可能性を信ぜず、政府をとおして独自の中国政策を推進すべく政府に圧力をかけた。こうして一九一五（大正四）一月一八日に、二一カ条要求が中国につきつけられたのである。これにたいして、犬養や頭山らは、ただたんに利権の獲得では満足せずして中国にたいする指導権の確立を期待して反対した。このことは、孫が前年に第二次大隈内閣が成立してまもなく、大隈首相に手紙で袁追放のために日本の援助をもとめ、そのかわりに日本人の中国居住の自由、一種の関税同盟、全面的な商業上の支配権などをあたえることを約束する提案をしていることと関連性がありそう^⑤だ。犬養の反対は、日本が中国にたいして当然指導的立場に立つべきだとする指導国家对被指導国家の原則にもとづくものであった^⑥。それにたいして、黒竜会系の立場は、それを一步すすめて、具体的に中国に安定した立憲君主制を樹立することを目的としていた。その点で、犬養派と頭山派は孫支持に堪してはたがいに提携しえた。こういう状況のもとで、孫文も積極的に日本政府の援助をえて、袁打倒を実現せんとした。三月一四日付けの外務省政治局長、小池長蔵あての手紙で、かれはいちだんと日本に優利な一一カ条よりなる日中両国の同盟条約の草案をしめして日本政府の自分にたいする関心をたかめようとさえした^⑦。もちろん、五月に日本政府と袁政府とがいわゆる二一カ条条約を締結するにおよんで、孫の構想は実現しなかった。しかも日本政府は、袁の立憲君主制を名目とする帝制運動に好意的であった。加うるに、日本の軍部は、もっぱら滿蒙に関心を向けていた。陸軍が、肅親王を擁立して滿州王朝を滿州で復興させようとする川島浪速や内田らの計画を援助したりするものそのところである^⑧。そのかぎりにおいて、中国問題の面での孫の存在はほとんど無視されていた。

一九一六年（大正五）四月末に、孫文は四年ぶりで上海にかえり、革命党の本部も東京より上海にうつされた。これは、前年末よりの反帝制運動の激化に期待をよせての行動であろうが、日本側の援助を断念したことも意味してい

るようだ。六月に袁が憤死するとともに、軍閥が各地で割拠して、政情がきわめて不安定であり、孫が政治活動にのりだす幕はなかった。そしてそのご一年あまりのあいだは、孫は上海で著述に従事し、『中国存亡問題』『民権初步』（一九一七年刊）などをあらわしている。翌年五月に張勳の復辟運動がおけると、孫はふたたび政治活動に復帰して全国に「護法」をよびかけ、七月に独立を宣言した海軍をひきいて広州にいたり、九月に軍政府を組織してみずから大元帥になって護法運動を展開した。だが南北の和平も軍閥の混戦状態の出現でさえぎられたまま、翌年五月末に大元帥を辞し、日本をへて六月末にはふたたび上海にかえって著述に従事した。このころに書いたのが、『孫文学説』と『実業計画』（一九一八年刊）である。

孫文がふたたび上海にかえったころは、いわゆる五四運動がようやくしずまったころであるが、孫はその後の新文化運動などから多大の刺激をあたえられたようで、翌年一〇月一〇日には革命党を中国国民党へと脱皮させて、国内に足場をかためていこうとする。そして一九二〇年（大正9）十一月末に広東にもどって軍政府を再興し、翌年四月に大統領に就任して正式に政府を樹立したが、陳炯明の反乱によつて一九二二年（大正11）八月に上海へ去った。その間に、宮崎は軍政府が再興されたときに、孫によばれて広東におもむき、一九二一年（大正10）ごろまで同地に滞在する。これは、宮崎と孫の最後の別れとなった。というのは、宮崎は帰国後健康がすぐれず、翌年一二月に死去するからである。このときにも、孫は宮崎に日本側の援助を要請したのであろう。だが、第一次大戦をつうじて独占資本主義段階が完成をみた日本の帝国主義は、しだいに中国の反帝民族運動に脅威を感じて各地に割拠する軍閥をあらゆることにのみ熱中し、しかも社会主義国ソ連の出現をにくむとともに、あわよくばシベリアを獲得せんとしてシベリアに出兵したが敗北するといった情勢で、孫を援助するどころではなかった。

一方、孫文は一九二一年（大正10）末に、桂林でコミンテルン代表マーリンと会見してソ連との道義的提携を話し

合、一九二二年（大正11）二月にはじまった香港海員ストには積極的に援助しているし、前年に発足した中国共産党の七月に上海でひらかれた二全大会の統一戦線形成のよびかけに応じて、張繼の紹介で北方における党の有力な指導者、李大釗を国民党にむかへ入れるなどし、国共合作への第一歩をふみだした。そして国民党を改組して、この国共合作の路線の上に新中国建設の夢を托すのである。一九二四年（大正13）一月、広州でひらかれた国民党第一次全国代表大会は、国共合作を確認し、連ソ・容共・労農援助の三大政策をあきらかにした。そのときにだされた大会宣言は、新三民主義の内容を明示するとともに、国民党が労働者、農民、プチ・ブル、ブルジョアジーという広範な諸階層をふくむ統一戦線の組織になったことをはっきりと宣言している。^⑨この宣言は、それにつづいて発表された『三民主義』とともに、統一戦線の綱領ともいえるべきものである。

一九二四年（大正13）一一月末に、北方軍閥との最後の話しあいのために北上の途次日本に立ちよった孫文は、神戸で貴族院の福原・池田両男爵、憲政会総務の望月小太郎、政友本党床次竹二郎の代理人、犬養の代理古島一雄、頭山満などに会って、関税権の回収と治外法権の撤廃を依頼している。ついて神戸商工会議所などの主催の講演会での「大アジア主義」と題した有名な講演においても、日本が西洋の「霸道」の手先となるか、東洋の「王道」の中心となるかの選択を迫り、ともに西洋列強の圧迫に抵抗するためには、まず日本が奴隷の主人たる地位をすて、みずから不平等条約を廃棄すべきことを強調した。そのかれは、このあと北京にいったが、かねてからの肝臓疾患が悪化して、ついに翌年三月に死去した。

孫文が生前に日本によせた期待は、死後にまったく裏ざられた。日本は、中国の民族解放運動を支援するどころか、その抑圧へとつきすすんでゆくのである。神戸で不平等条約の撤廃を依頼された頭山は、孫のその申しいを非難して、満州および蒙古における日本の権益を保証すべきだと警告している。^⑩孫が病いに倒れた知らせを聞いた萱野

は、北京に急行して病床の孫を見まうと、「頭山さんも犬養さんもお元氣かね」とたずねたのち、神戸での講演の反響をたずねて、ラジオや新聞などで全国民にふかい感銘をあたえたという満足げであったことをつたえている。^⑩だが、かれの「大アジア主義」の講演がじつは日本帝国主義にたいする痛烈な批判であったことを正しく理解した日本人がどれだけいたであろうか。しかもこの講演は、第一次大戦をへてすでにわが国の独占資本主義が確立されて、日本の帝国主義への移行がその経済的土台をもふくめて完了していた時点においておこなわれたものであった。孫文は、徐々にではあるが、このことを理解して社会主義ソ連に接近し、国共合作にふみきった。それなればこそ、日本帝国主義にたいする苦言を呈するにいたったのであろう。このことは、孫が生前に書きのこした「遺囑」と「ソヴェト同盟への遺書」という二つの遺書からもはっきりとわかる。「遺囑」では、「民衆をよびさまし、そして世界でわれらを平等に待遇する民族と連合し、ともに奮闘」することを要望するとともに、「いま革命はまだ成功していない」として、「最近の主張たる国民会議の開催、不平等条約の廃除」の必要性を強調している。そして「ソヴェト同盟への遺書」においては、ソ連を「自由なる共和国同盟」で「不朽なるレーニンが被圧迫民族にのこした世界の真の遺産」だとたたえ、「民族革命運動の仕事を進めて、中国をして帝国主義が中国に加えている半植民地状態の羈絆^{きはん}を離脱」することへの提携・協力をもとめている。^⑪かれにとっては、「われらを平等に待遇する民族」として信頼するにたるのは、ソ連人民をおいてはかになかったのだ。

孫文が死んでから四年後に、犬養・頭山・宮崎の未亡人らがそろって中山陵に詣でた。だがこのときには、すでに宮崎派は宮崎の死とともに解消しており、犬養・頭山両派は普選運動らしい、議会主義をめぐる反目しがちであった。しかも昭和初年の大恐慌を契機として、軍部と頭山一派は超国家主義的イデオロギーを媒介としてかたく結びつき、ファッショ化のコースをつっぱしる。犬養は、一九二九年（昭和4）に田中義一大将にかわって政友会総裁にな

り、満州事変がばっ発した二カ月後に、さきの若槻内閣の穩健な幣原外交よりもずっと強力な大陸政策を呼号しつつ内閣を組織した。そしてかれのメッセンジャーとして萱野長知を中国に派遣して満州事変と上海事変を収拾せんとした。だが、かれのこのくわだても、軍部の主張で萱野がよびかえされて、失敗に帰した。^①それからほどなくして、この老首相は、北一輝や頭山らの感化をうけた青年将校の一团によって暗殺されてしまう。こうして頭山だけは生きのこり、ファッショ化の進行過程で超国家主義のカリスマ的存在となる。他方、孫に一時協力した日本人のなかからは、北一輝のような国家社会主義者があらわれて、日本のファッショ運動にイデオロギー的根拠をあたえた。軍部はその後中国侵略という強硬策に訴えて、満州を中国から分離させて満州王朝を復活させ、北中国には冀東政權をつくり、さらに日中戦争いごには国民党の副総裁であった汪兆銘をかつぎあげ、かれこそは孫文の衣鉢の継承者だと宣伝して、南京に新たに国民政府を成立させたりする。これはちょうど、かつて袁世凱が政權をにぎったさいに、日本政府が立憲君主制・保守的改革・革命的共和制の三勢力のうちのいずれをえらぶべきかをきめかねたその迷いの再来たることをおもわせる。しかもその迷いは、蒋介石にもあったのではなからうか。孫文の最終的な国共合作の夢は、蒋介石によって消されてしまい、こんにちのいわゆる二つの中国が存在するという悲劇をもたらしている。孫文の未亡人たる宋慶齡は中華人民共和国政府の副主席となり、彼女の妹の宋美齡が孫文の正当な後継者であることを自負する台湾の中華民國總統、蒋介石の夫人であるということが、このことをよく象徴しているようだ。いずれにしても、日本のアジア主義がもたらした産物であることにはちがいが無い。

① Jansen, op. cit., P. 144 and P. 255 n. 24.

② 臼井勝美「辛亥革命—日本の対応」日本国際政治学会編『日本外交史研究・大正時代』（一九五八年）一三—二五ページ。

③ Jansen, op. cit., P. 150.

- ④ Ibid., P.172.
- ⑤ 渡辺幾治郎『大隈重信』（一九四三年）二四二—二四三ページ。
- ⑥ 尾崎行雄の考えも犬養に近い。中原信雄「尾崎行雄における対外強硬論の論理」『日本歴史』（一九六〇年二月号）七一—七八ページ。
- ⑦ Jansen, op. cit., PP. 192—193.
- ⑧ 栗原健「第一次・第二次満蒙独立運動」『日本外交史研究・大正時代』五二—六五ページ。
- ⑨ 孫文『三民主義』（安藤彦太郎訳）（下）（一九五七年）二〇三—二二一ページ所収。
- ⑩ 『東亜先覚志士紀伝』第二巻、七六八—七六九ページ。
- ⑪ 萱野『中華民国革命秘笈』三五〇—三五二ページ。
- ⑫ 孫文、前掲書、二五四—二五五ページ。
- ⑬ 極東軍事裁判における犬養健の証言。Jansen, op. cit., P.200 and P.263 n.68.

XI 結 論

孫文の革命運動を援助した日本人と孫文をむすびつけた紐帯は、いったいなにであったのか。ひとつは、一九世紀末から二〇世紀はじめにかけての西洋帝国主義の脅威であり、もうひとつは、急速な近代化によっていち早く被圧迫民族としての地位をはなれた日本への自信と期待であったといえよう。そしてそこに底流しているのは、同種・同文的な親近感でもあった。このことは、とくに孫文に当てはまるであろう。かれは、すでに日本が帝国主義に移行してから、なお日本の帝国主義を西洋の帝国主義ほど危険視してはいなかったようだ。事実、かれは、一八九五年（明治28）の広州拳兵に失敗して日本に亡命して以来、一九二四年（大正14）末に最後の訪問をするまでのあいだ、何回となく来日し、またたえず日本を革命運動の策源地たらしめていた。このことは、かれがいかに日本に親しみを感じ、またいかに日本に期待していたかをものがたっている。もちろん、孫文が援助を要請するばあいのやり方には問

題があろう。かれの交渉のしかたには、多分にマキャベリズムのな点が感じられる。とりわけ、袁世凱打倒をくだてたときには、そのことが顕著であった。いくたびかの失意と絶望を経験したかれにしてみれば、むしろそれは当然であつたといえる。とはいえ、かれは終始一貫して革命のために努力し、共和主義の理想をにかけてやまなかつた。もつとも、かれの思想や行動には多くの疑問がないわけではない^①。しかし、過去における失敗をゆつくりとふまえてそのなかからさまざまな教訓をくみとり、それを自分じしんのものとして身につけ、あくまでも自主的に、かれ独特の思想を形成していった。しかもかれの思想と行動には、徹底したアジア連帯意識が筋金になっていた。そのかぎりにおいては、問題はむしろ、かれに協力した日本人の側にあるといえよう。

孫文と日本人との協力関係も、はじめのうちはアジア連帯意識を基調としていた。すくなくとも、一九〇五年（明治38）の東京での中国革命同盟会の結成やその前後の挙兵は、アジア連帯意識にもとづく協力関係によってなされたものであった。中国のみならず、朝鮮やフィリピンの独立運動を支援したのも、それなればこそである。ところが、問題は、ちょうどそのころの日露戦争を契機として、日本がアジア諸国のなかで決定的に優位を占めるにつれて、欧米列強にたいする被圧迫民族としての同質的意識がくずれることにある。すなわち、日本人のがわのアジアの他民族にたいする被圧迫民族としての同質的意識を内容とするアジア連帯意識が、わが国の急速なる近代化にともなう他国との量的な差異の認識と相まって、日本をアジアの盟主たらしめんとする使命観を軸とした大アジア主義にとってかわられるのである。この過程は、わが国の帝国主義への移行と表裏一体をなしていた。これが、日本人の孫文にたいする協力関係がおちいることをよぎなくされた落とし穴であつたわけだ。いいかえると、アジア連帯意識と膨張主義とは、わが国内外の情勢の変化を媒介として、きわめて微妙に錯綜しあいつつ、ついには大アジア主義にとけこんでしまうのである。この大アジア主義こそは、孫文が一九二四年（大正13）に最後の日本訪問のときに非難した「大アジ

「ア主義」にはかならなかった。日本人のがわにすでに被圧迫民族としての膨張主義が頭をもたげていることを、孫文はいみじくも洞察していたのである。

では、日本人のがわの立場はどうか。犬養・頭山・宮崎三派の協力という事実を現出せしめた発端がそもそもアジア連帯意識であることは、いうまでもない。しかしながら、各派の主観的意図は、微妙な点でニュアンスを異にしていた。各派に共通していることは、心情の面において連帯意識を基調としていたことである。ところが、論理の面ではわが国の帝国主義への移行にともなう、各派のあいだに大きな断層を生じていった。頭山は、同種・同文的な同質性をアジア諸民族のなかにみとめるとともに、近代化にともなう優越意識に裏づけられた指導力の発動という点で膨張主義を正統化する。これは、かの民権と国権との乖離にともなう当然の帰結としての超国家主義へのコースを代表している。それに反して、犬養のばあいには、議会主義を標榜しているかぎりにおいて、民権と国権との乖離はみられない。むしろ、かれにあつては、わが国を欧米列強と対等の位置におくことが究極目標で、議会主義と膨張主義とがそれを実現するための両輪をなしていたといえる。憲政擁護と対外強硬という二つの柱は、かれのばあいには究極目標を達成するための不可欠の存在であつたのだ。その点では、日本の帝国主義化を媒介として、犬養・頭山の両派は提携しえたわけである。だが、頭山一派は、わが国を欧米列強化する意識を排斥して、「国体」中心に膨張主義をてこにしたファシズム化の方向を打ちだす。ここにおいて、犬養・頭山両派のあいだには大きなみぞができ、互いに相反目するにいたる。そしてついには、犬養は頭山らの方向に共鳴する青年将校の手によって暗殺されるのである。ここにおいて犬養らの日本を欧米列強化せんとするコースは、「国体」的意識を支柱としたファシズムのコースにとつてかわられて、軍部の政治的進出をもたらし、ファシズム体制が確立されるにいたる。だが、犬養に代表される議会主義者といえども、国家主義的色彩が濃厚で膨張主義政策を是認し、日本の帝国主義的發展を肯定するというより

もむしろそれを助長する存在であつた点では、ファッション化にたいする本質的な反対勢力たりえず、軍部の政治的進出のまえにもろくも議会主義を投げだして、みずからファシズム体制に迎合することは、その後の歴史がしめすとおりである。

犬養・頭山両派にくらべると、宮崎一派の活動はきわめて限定されていた。かれらは、主として直接行動の面で孫文の活動を援助した。この点では、頭山一派とはほとんど差がない。しかし、終始一貫して孫文の革命運動を援助し、しかもかれとたえず緊密な連絡をとつてきた点で、頭山一派といささかちがう。頭山らの重点は、どちらかというところ、満蒙における権益の擁護・獲得におかれていて、孫文の革命を支援するということは、その目的を達成するための手段にすぎなかつたかのごとき感がつよい。つまり、宮崎一派の特徴は、孫文の共和思想への共鳴からかれと固く結びつき、あくまでもかれを中心として行動したことにある。そのかぎりにおいては、この派の考え方のなかには民権と国権の乖離はみとめられず、かれらの行動の基調はあくまでもアジアの諸民族を被圧迫民族として、欧米列強に対立する同質の民族として意識するアジア連帯意識であつたことがいえる。しかもかれらにあっては、孫文にたいする友情というものが、その在野精神と相まって、相互の関係を質的に同等な意識にもとづくものたらしめつづけた。たゞかさなる革命運動の失敗にもかかわらず、つねに孫文を援助しつづけたことは、このことを明白にしめしている。しかしながら、日清戦争から日露戦争をへて日本が大陸にたいして露骨な膨張政策をとるにしたがつて、連帯意識そのものは膨張主義とわがちがたく結合し、ついには前者が後者におきかえられるにおよんで、宮崎らの独自の立場は宙に浮かざるをえなかつた。このことと並行して、従来犬養・頭山両派の中間にあって独自の立場を保持しつつ、両派の仲介的存在であるとともに、孫文の直接的行動の面での急先峰として活躍した宮崎一派の存在意義は急速に減少してしまふ。宮崎らが惠州事件いごにはもっぱら孫のメッセンジャー的な存在と化してしまふ理由はここにある。

宮崎じしんについていえば、かれが自由民権的な考えのもち主であったことから考えると、思想的にはかれがもっとも孫文に近かったようだ。このことは、かれが孫文に会ってすぐにその人柄にほれこみ、それらしい終生かれを支援しつづけたことでもわかる。その意味では、かれこそは最後までアジア連帯意識の立場で孫を援助した唯一の存在といえるかもしれない。というわけは、純粹にその立場で中国革命を援助した同志は、かれの晩年においてはもはやかれ一派の存在意識が失われていたことから考えて、他に見あたりそうもないからだ。その意味では、宮崎一派は宮崎の死とともに消滅し、犬養派ないし頭山派に吸収されて霧散してしまったといえる。他の面からすれば、かれがきわめて直情的な人間であったことが、最後まで連帯意識に立脚することを可能ならしめたのではあるまいか。孫文は『三十三年之夢』によせた序文において、宮崎のことを評して「現代の俠客」と^④いっているが、これはまことに至言だといえよう。膨張主義的な風潮のたかまりを反映して頭山的な大陸浪人が輩出した当時であって、みずからも大陸への雄飛をころざしつつもかれらを「支那占領主義者」といつてかれらと自分とをきびしく区別し、孫文の革命運動にたいする協力のみに精魂をかたむけて努力したところに、宮崎の面目躍如たるものがある。その意味においては、宮崎こそは当時のいわゆる大陸浪人のなかにあつては、その代表的な人物ではなくて、例外的にしてきわめて特異な存在であつたといふべきである。

しかしながら、疑問はのこる。それは、宮崎が生きながらえていたならば、はたしてどのような立場をとるかということである。かれの晩年には、もはやナイーブな自由主義的立場からの連帯意識を維持しうる状況は存在していなかった。日本は公然と帝国主義へ移行して、満蒙に獲得した權益を足場に大陸侵略のチャンス^⑤を虎視たんたとねらっていた。それにたいして、中国では反帝大衆運動がたかまり、日本商品のボイコットなどがさかんになりはじめていた。こういった状況の推移を冷静に観察した孫文は、日本の「大アジア主義」へのコースを見ぬくとともに、社会

主義へと接近して親ソ容共の線にふみきるのである。これこそは、犬養・頭山両派との思想的な断絶を意味する。事実、当時の状況下においては、すでに社会主義的立場による以外に真の民族独立革命を達成することは不可能になっていた。もちろん、宮崎は、兄民蔵の感化でヘンリー・ジョージ流の土地単一税主義を内容とする「地権平均」説その他の点で孫文と思想的にきわめて類似点が多かったといえよう。たしかに「地権平均」の考えは同盟会の綱領にとり入れられており、孫文のいわゆる「三民主義」のなかにも「耕者有其田」とならんでかかげられている。レーニンもこの「地権平均」の考えを、その著『中国の民主主義とナロードニキ主義』（一九一二年）のなかで「主観的社会主義」と名づけている。そのかぎりにおいては、宮崎も社会主義へと接近する可能性をもっていたといえる。だがしかし、宮崎と同じく孫文の革命運動に参加した同志のなかからは、社会主義者より国家社会主義者に転身する北一輝なる人物もでてくる。この国家社会主義のコースは、第一次大戦後のいわゆる大正デモクラシーに代表される民主主義的・社会主義的社会運動の興隆にたいする反動として明治の国粋主義運動より転化した反社会主義運動に同調してファシズム体制を招来する点で、頭山一派と合流してしまう。こうみてくるならば、宮崎がこれらの連中とはまったく異質の思想のもち主であったという確証はない。

このようにみえてくると、宮崎をもつて膨張主義とは完全に無縁な存在だったとすることは不可能だ。とはいえ、これはナイーブな自由主義的立場で孫文の革命運動を援助する姿勢をつらぬきとおした。そのことをつらぬきとおした。そのことをその後の中日関係の推移との関連においてかんがえてみると、かれこそはもつとも後悔されることのない存在だといえるのではなからうか。なぜなら、孫文にたいする犬養・宮崎・頭山らの友情や協力関係は、のちには中日両国のがわからともどもに後悔されるからである。宮崎をのぞく他の多くの日本人たちは、孫文の後継者たちを恩しらずときめつけた。孫文の後継者たちは、かつての協力関係や友情はすべて、日本人がわの侵略的意図の

あらわれであったと見なすにいたっている。だが宮崎が、犬養・頭山両派にくらべてかなり思想性がすくなかったということは、孫文と相前後してその後の中日関係の悪化をみることなくこの世を去ったということと相まって、かれにたいする非難を大いに軽減しているといえよう。このことは、孫文がやはり思想性がすくなく、しかも革命の途上でこの世を去った点で、過去における行動面での欠点とか矛盾とはまったく無関係に中国革命のすぐれた指導者としてたかく評価されていることと一脈相通じるものがあることをおもわせる。このことには、宮崎と孫文との、パーソナリテイの面における類似性というものをプラスできよう。酒と女と革命を趣味とするといった豪傑肌の面においても、両者は他の友人以上に親近感を感じあっていたことは、周知の事実である。いうなれば、孫文と宮崎との協力関係は、主義・主張以上に人間的な要素が重きをなしていた。それなればこそ、孫文は宮崎をもっとも信頼していたのであろう。もっとも、孫文の犬養や頭山にたいする友情とても、最後まで変わりはなかったが、晩年にはかれらとの協力関係は疎遠になった。この点では、いちおうは宮崎と孫の関係も同様の運命をたどったであろことがかんがえうる。とはいえ、宮崎が実質的には当時の日本の社会になんらの政治的・経済的基盤をもたぬ存在であったことからかんがえると、孫にたいする友情と協力関係はつねに平衡をたもちつづけたであろことが想像される。つまり、日本の社会から浮いた存在であったことが、同じく過去の中国社会からも、当時の中国社会からも浮いた存在であった孫文とより親密たりえた理由の一半をなしていたといえるのではなからうか。ここに宮崎を評価するカギがあるようにおもわれる。孫文は、かれの死後の中国国内の政情の不安定と露骨な日本の侵略に対処するための国内統一のために、古くからある皇帝伝説に代わるべき共和的伝説のヒーローにまつりあげられた。それは、孫文が浮いた存在であったればこそである。それに反して、宮崎は、かれの死後における日本の大陸経営とファシズム化との関連においてもつばらにいわゆる「大陸浪人」の代表的人物にかつぎあげられて、頭山流の「国体」論的膨張主義をカモフラージ

ユするための道具に供されたかのごとき感がつよい。これも、宮崎が浮いた存在であったからである。だがその宮崎が、頭山派につらなるいわゆる「大陸浪人」とは多少ニュアンスを異にする存在であったことは、すでにみてきたとおりである。

要するに、宮崎は思想家たるにはあまりにも思想性がなく、行動家たるにはその社会的基盤を欠いていた。しかしその行動の基調はあくまでも自由民権的なナイーブな自由主義で、そのかぎりにおいてかれのアジア主義の論理は共和的思想に近かったと仮定することが可能ではあるまいか。かれのばあい、孫文との結びつきの原因はここにもとめられ、動機と行動との組みあわせは、直情的な人間にふさわしくまことに単純であった。それなればこそ、かれの連帯意識はなんら状況の変化に影響されることなく、純粹にたもたれたといえるのではあるまいか。事実、かれの思想的な面に、連帯意識と膨張主義との微妙な分離と結合という一般的なアジア主義の傾向をみとめることは困難である。その意味においては、かれのアジア主義は、非アジア主義的なアジア主義であったといえよう。だが、それが具体的にどの程度まで日本の帝国主義に反対する内容を具備していたかということが疑問である。連帯意識そのものは具体的にそれによってなにを実現するかということがはっきりしていなければ、それ自体の価値はない。その点では宮崎の自由民権的なナイーブな自由主義がすでに状況の変化にともなってしだいに時代おくれのものとなり、その創造的な価値を減じていったことはあきらかである。にもかかわらず、孫文の思想と行動にふくまれている論理を自己のものとして追求したところに、宮崎流のアジア主義の特色があらわれている。アジア主義は、かならずしも膨張主義ないし侵略主義とはかきならない。事実、日本人が孫文の革命運動に協力したところには、まだ日本人のなかに膨張主義とはかきならないアジア主義が根をおろす可能性がかすかにのこされていた。だが、結果的には、このチャンスは生かされなかった。宮崎的なものは、けっきょくのところ発芽しただけで、成長する土壌のないままに発育せず、

「大アジア主義」という雑草の成長のためのこやしとなったにすぎない。正直なところ、これが宮崎のはたした歴史的役割であつたのではなからうか。

- ① 拙論「孫文という名の革命家」『学校通信』（一九五八年一月号）七一―七五ページ。
- ② 『三十三年の夢』二ページ。